

# 白詩訳解ノート

## 一新釈漢文大系『白氏文集』第一冊・第二冊（上・下）・ 第三冊・第四冊を対象として—

柴田清継

### はじめに

たまたま或る語の用例集めの一環として『白氏文集』を調べてみようと思ひ立ち、手っ取り早く明治書院新釈漢文大系の『白氏文集』（全13巻）に拠り、その語の含まれる諸作品を逐一閲読してみたところ、作品の書き下し文、通釈、語釈等の部分に誤りではないかと思われる個所が散見し、冊によっては解題や余説等の部分も含め、修正すべき個所が相当数存在することに気づいた。

新釈漢文大系は、大学等の高等教育機関はもちろん、全国の都道府県立図書館や一定規模以上の都市の市立図書館ならまず間違いなく所蔵されている叢書であり、高校生や大学生、一般の市民から専門の研究者に至るまで、漢文の古典作品に触れたいとか、調べたいかと思つた場合、まず念頭に浮かびひも解かれることの多い存在になっていると思われる。中でも『白氏文集』は、日本文学との関連が深いため、『論語』などと並び、最も閲読される頻度の高い書物ではなからうかと想像される。そのようにきわめて公共性の高い書物に、誤りであることの明らかな記述が一定数存在するのは由々しき問題であると、筆者は思う。

本稿で対象とした0665《長安閑居》の第2句「意中長似在深山」を、著者は「意中 深山に在る似り長ず」と読み、「心の中は深山で隠居しているよりも素晴らしい感じだ」と訳している。なんとも変な読み方をするものだなあと「感心」していたら、これと同じ読み方をして、白詩に見られる「深山」の「由来と行方」について考察した論文<sup>1)</sup>のあることに気づいた。偶然の一致かもしれないが、ほかにも漢文資料の扱いに十分には習熟しておられないことを窺わせる個所があるので、新釈漢文大系の読みを鵜呑みにされた可能性もあるかもしれないと筆者は邪推しないでもない。

ともあれ、漢文資料を読むことについて一応専門家を自認している筆者としては、気づいてしまった誤りを放置することに良心の呵責を覚える。そこで、筆者は新釈漢文大系『白氏文集』のすべてを閲読し、誤り、もしくは要検討と判断した個所の修正案を書き記す作業を始めた。まず、最も深刻なように思われた第9冊の修正案を記述したものを『武庫川国文』第94号（2023年3

月)に発表し、その後、これまでに第4・10・11・12冊(上)も作業を終えたので、まとめたものを筆者の「リサーチマップ」の「資料公開」のコーナーに登載した。本稿は第1・2(上・下)・3・4冊を対象とするものである。発表済みの第4冊も加えたのは、リポジトリ公開となる本誌にも発表しておいた方が、世間の目に触れる機会が多いだろうと考えたからである。なお、本稿に組み込んだことにより、書式・記述方式等に若干の変更が生じた。

さて、本稿ではテキストクリティークは問題としない。すべて新釈漢文大系第97巻、岡村繁著『白氏文集 一』初版(明治書院、平成29年5月20日)、同第98巻、同『白氏文集(二上)』初版(同、平成19年7月25日)、同第117巻、同『白氏文集(二下)』初版(同、同)、同第99巻、同『白氏文集(三)』初版(同、昭和63年7月25日)、同第100巻、同『白氏文集(四)』初版(同、平成2年11月25日)に提示されている本文をテキストとする。凡例としては、以下の通り。①単行本名は『』で括り、作品名・論文名等は《》で括って示す。②白居易の作品名の前に冠した数字は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂書店、1960年)で付せられた作品番号である。③「書下」を「書き下し文」の略として使う。④AをBに改めるべきだということを、「A→B」という形で示す。⑤補足説明や参考にした文献名の提示は※を目印とする。⑥「～を参照されたい」の意味で、➡の後に文献名を提示する場合もある。⑦できれば修正したほうがいいのではという程度の問題の指摘には、『感想』を目印として冠した。

⑥では、『白氏文集』閲読作業の副産物として書いた拙稿を提示することが多いが、頻出するものもあるので、下記のように記号化して示すことにする。—《漢文読解ノート—『白氏文集』読解作業の中間報告として》(『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第33号、2023年)第1節→「拙稿1-1」、同第2節→「拙稿1-2」、同第3節→「拙稿1-3」。《白詩における「…できる」の意の「解」字について》(『人文学論集』(大阪公立大学人文学会)第42集、2024年)→「拙稿2」。

なお、「拙稿1-1」は、受け身や尊敬ではないのに、「見+動詞」を「～(らる)」と読むこれまでの訓読の習慣に、筆者が異を唱え、「見<sup>われを</sup>～」とか「見<sup>われに</sup>～」とかと読むべきだと卑見を述べたものである。新釈の著者は、一種の約束事として伝統的な読み方を踏襲されただけであろうと推察するものの、この訓読語が日本語として独り歩きを始めると、原文になかったニュアンスが付加され、それによってズレた本文理解がなされる可能性が大きくなるから、読み方を改善した方がいいと筆者は考えたのである。執筆当時は参考文献があまり見つからなかったため、一人相撲をとったのに近いような代物になったが、その後偶然のきっかけから、この問題に関連する日中両国の研究者の論文等

の参考文献が一定数存在することを知った。それらの文献を参考にして、目下あらためてこの問題に対する講究を進めているところであり、近々講究の結果をまとめてみたいと思っている。

さて、本稿のようなものを発表して、どれだけの人の目に留まるか、全く心もとないが、少しでも多くの方々の目に触れるよう期待している。筆者の勇み足や見落とし等も少なくないだろうと危惧する。読者の皆様の忌憚のないご批評をお願いしたい。

## 記

『白氏長慶集』の序 第1段書下 p.10「傳へ」→「傳へた」。0001 賀雨詩 通積第1段4行「意志」と第2段3行「意思」統一すべきでは？0003 孔戡詩 第6句「非義不可干」通積→「～犯すことを容認せず」。※自身が不義を犯すのを潔しとしなかったのではなく、上司が不義を犯すのを容認しなかったのだと解すべきようである。【参考】霍松林『白居易詩译析』（黑龙江人民出版社、1981年）P.293の注釈：孔戡在山东的军队中工作（担任昭仪节度使卢从史的书记）的时候，卢从史常常干非法的事情，孔戡不能容忍，进行了不调和的斗争。见《韩昌黎集》卷二十六《孔君（戡）墓志铭》。第27～30句「謂天不愛人，胡為生其賢。謂天果愛民，胡為奪其年」書下・通積→「天 人を愛せずと謂はんか、～天 果たして其の民を愛すと謂はんか、～」・「天は人民を愛さないのだと言ってみようか、しかし、それならばなにゆえに～天はやはり人民を愛するのだと言ってみようか、しかし、それならばなにゆえに～」。※霍松林上掲書 P.292 の訳文：如果说老天不爱人民，为什么要生这样的贤人！如果说老天真爱人民，为什么要夺贤人的生命！0004 凶宅詩 解題5行「所にして、之を信ずるを」→「所なるを知り、之を信ず」。※陸昕・郭力弓・任徳山主編『白話太平広記』（北京燕山出版社、1993年）P.956《韓朝宗》の条の現代語訳：（前略）于是知道，凡是恨凶险的宅院都是鬼神所在的地方，他相信那人说的话。第24句書下「従りする」→「従る」。0006 觀刈麥詩 第7句書下「隨つて」【感想】第4句「覆うて」・第20句「捨うて」・第25句「念うて」とウ音便が続出する中で、なぜこれだけ促音便なのか。第24句書下「有り」→「有る」。※第21句「か」との係り結びで、連体形にせねばならない。0007 題海圖屏風【感想】解題2行「庄」→「莊」。0010 李都尉古劍詩 第18句「無作神兵羞」書下・通積→「神兵をして羞ぢしむる無かれ」・「宝劍に恥をかかせないようにしてほしい」。※王鏊『詩詞曲語辭例積（第二次増訂本）』（中華書局、2005年）pp.419-420の「作〔二）』の条で「作，使，让，或为动词，或为介词」と述べ、

その用例の一つとして本句を挙げているのによる。通釈 6 行「たとえずたずたに」→「ずたずたに」。0013 月燈閣避暑詩 第 16 句「將何救旱苗」書下・通釈→「何を將てか旱苗を救はん」・「どのような方法で〜」。※霍松林前掲書 p.73 の訳文：拿什么解救受旱的禾苗！0016 哭劉敦質詩 解題 8 行「健在しており」→「健在で」。0017 答友問詩 第 6 句書下「消け」→「消く」。0018 雜興 第 21 句書下「語る」→「語ぐ」。0022 讀漢書詩 第 20 句書下「陷」→「陥」。0023 贈樊著作詩 解題 7 行「を能」→「能」。余説 6 行正文「問」の左下に「一」（返り点）を脱す。19 行書下「信・」→「信」。0026 登樂遊園望詩 第 5・6 句「愛此高處立、忽如遺垢氣」書下・通釈→「此の高處に立てば、忽ち垢氣を遣るるが如くなるを愛す」・「このような高い場所に立つと、そのとたんに俗塵の雰圍氣から超脱したような気分になるのが気に入っている」。※霍松林前掲書 p.297 の訳文：爰在这高旷的地方站立，仿佛摆脱了汗浊的气氛。余説 3 行書下「憶はるる」→「見憶ふ」。※➡拙稿 1-1。7 行書下「たり」→「たれ」。※係り結び。0027 酬元九對新栽竹有懷見寄 頃有贈元九詩。云、有節秋竹竿。故元感之、因重見寄。題書下「寄せらるる」→「見寄する」。「寄せらるる」→「見寄す」。※➡拙稿 1-1。解題 15 行書下「感を」→「感に」。第 17 句「分首今何處」書下→「〜何くにか處る」。0028 感鶴詩 【感想】解題 3 行「かなり白居易と」→「白居易とかなり」。【感想】通釈 2 行「乾」→「渴」。余説 3 行書下「の妍あり」→「のごと（く）妍（妍）し」。8 行書下→「〜所、誤つて微物に遷さるる無からんや」。0029 春雪 【感想】解題 3 行「とした」→「と訴えた」。第 15 句「所憐物性傷」書下→「憐れむ所は物性の傷つくこと（にして）。【感想】通釈第 3 段 1 行「万民たち」→「万民」。※「万民たち」という言い方も見かけるが、「万民」はいわば複数名詞なので、「たち」は不要と思う。0031 白牡丹詩 【感想】解題 8 行「現存していないが」この「が」の前後はどのようなつながりか。少なくとも逆接ではなさそう。0032 贈内詩 【感想】第 3・4 句「他人尚相勉、而況我與君」「我と君」が「他人」よりももっと「相勉」めなければならぬのはなぜか、不明。0033 寄唐生詩 【感想】題書下「寄す」0034 解題 5 行「寄せ」と不統一。【感想】解題 11 行「重さるる」→「重せらるる」。※サ行変格活用動詞の「る」「らる」への接続を 12 行「登せられ」とそろえる。【感想】通釈 5 行「だが、」不要。※前後、逆接にはなっていない。10 行「させられ」→「され」。※「左遷する」は他動詞。0034 傷唐衢二首 【感想】通釈第 2 段 2 行「酒もすっかり酔いが回ってしま」→「すっかり酒の酔いが回」。【感想】4 行「歩き」→「進み」。0037 悲哉行 第 1 段 4 行「やっと始めて一回」→「やっと」。※「やっと」と「始めて」は意味が重なるから、どちらか一つでよい。二回及第する必要はないから、「一回」は不要。【感想】第 2 段 2 行「仕上げた」もっといい訳語はないか。0038

紫藤詩 解題1行「体」→「態」。0043 初入太行路詩 【感想】解題2行「し  
かし」不要では？0044 鄧魴張徹落第詩 【感想】解題14行「最も可能性が  
高い元和三年春と推定される」→「元和三年春と推定するのが最も可能性が高  
い」。第2句「奏罷無人聽」通釈→「演奏が終わるまで、誰も聴こうとする者  
がいないありさま」or「演奏が終わると、誰も聴こうとする者がいなかったこ  
とが分かるという次第」。第9～12句「衆目悦芳豔、松獨守其貞。衆耳喜鄭衛、  
琴亦不改聲」書下・通釈→「～悦も、松～。喜ぶも、琴～」・「～松だけはじ  
つと～。大衆の～喜び狂っても、～七絃の琴だけは正しい～」。0053 丘中有一  
士二首 解題3行「では」→「は」。5行「字を」→「字を戴き」。6行「、それ  
ぞれ挿入」→「挿入」。0056 杏園中棗樹詩 第15句「眼看欲合抱」書下・通  
釈→「眼看 合抱たらんと～」・「見る間に一抱えほどの大きさになろうとし」。  
0059 寄隱者 余説12行「『施』」→「施」。0060 文柏牀 【感想】通釈第2  
段4行「もはや植物としての生命は一度失うと」→「植物としての生命は一度  
失うともはや」。【感想】5行「しまう者とは」→「しまうのは」or「しまう者  
は」。0061 潯陽三題 并序 第16句書下「入る」→「入るる」。通釈第2段3  
行「木には」→「木にも」。諷諭二 古調詩 五言 凡五十八首 (p.329) 解題5  
行「綴られた」→「綴った」。0065 續古詩十首其一 【感想】第7句書下「名  
の歸り」→「名もて歸る」。通釈第3段「たに」→「たい」。0068 續古詩十  
首其四 【感想】第10句書下「盈たしむ」→「盈つ」。0071 續古詩十首其七  
第19句「何意掌上玉」書下・通釈→「何ぞ意はん (or意はん) ～」・「どうし  
て予想しようか、昨日～」。※張滌華主編『全唐詩大辭典』第1卷 (山西人民  
出版社、1992年) p.313「何意」の条の②番目の釈義に「哪里想到，岂料」と  
述べて、その用例に本句を挙げているのによる。0075 秦中吟十首 并序 解  
題2行「を輩出し」→「が出」。※「輩出する」は自動詞で、「有能な人材が  
つぎつぎに世に出る」の意 (『福武国語辞典』による)。其一 議婚 解題1行「結婚  
が」→「結婚に関する状況が」。第14句書下「す」→「する」。0076 秦中吟  
十首 重賦 【感想】解題6行「なおもまだ」→「なおも」or「まだ」。【感想  
】第34句書下「ぜらる」→「ず」。第38句書下「くせ」→「く」。※「久しく  
す」は他動詞なので、目的語が必要。0078 秦中吟十首 其四 傷友 通釈第1  
段2行「ていて」→「て」。0080 秦中吟十首 其六 立碑 通釈第2段4行「か  
さ」→「かせ」。余説15行「縣」→「県」。16行「歸」→「帰」。0084 秦中  
吟十首 其十 買花 【感想】余説28行「看る」→「看る」と。29行「愛さ」  
→「愛せ」。38行「馬」→「馬に」。44行「り」→「る」。※「ぞ」との係り結  
び。45行「衆推賈誼為才子 帝喜相如作侍臣」書下→「賈誼を推して才子と  
為し、～相如を喜びて侍臣と作す」。48行「先に有」→「先に」。【感想】「は  
んばい」→「販売」。49行「しめ」→「しむ」。「並びに一時に」→「一時に並

び」。61行「好く」→「好んで」。62行「手に及びて勘驗するに」→「<sup>と</sup>手りて勘驗するに及びて」。71行「戸」→「戸」（2か所）。「じ」→「ぜ」。【感想】75行「つての」→「るが」。【感想】「自らも」→「も自ら」or「自ら」。0085 贈友五首 并序 序 【感想】通釈1行「我」→「私」。語釈3行「堯」→「堯」。※「堯」は俗字。0086 贈友五首 其二 通釈第2段5行「民たち」→「民」。※「人民」は言わば集合名詞で、複数の意味を含んでいる。0087 贈友五首 其三 【感想】解題3行「度の復活」→「度を復活させること」。通釈第2段5行「くさたち」→「くさ」。※「民くさ」は言わば集合名詞で、複数の意味を含んでいる。0088 贈友五首 其四 【感想】解題1行「尹について、～下」→「尹が近年頻繁に交代し、行政力が低下していること」。【感想】2行「人物」→「某人」。【感想】余説1行「のか～好資料」→「のかという問題は、この連作詩の成立年代を確定する格好の手掛かり」。【感想】余説37行「象徴」→「代表」。※「象徴」は「抽象的なことや精神的な内容を、その感じをもつ具体的な形・色・音などで表すこと。～」（『福武国語辞典』）。0090 寓意詩五首 其一 第6句書下「中つ」→「中たる」。0091 寓意詩五首 其二 【感想】解題3行「僚たち」→「僚」。0092 寓意詩五首 其三 通釈第2段7行「結託」→「交際」。※日本語の「結託」はいわゆる「<sup>みすみす</sup>貶義語」。0093 寓意詩五首 其四 第11句「眼看秋社至」書下・通釈→「<sup>みすみす</sup>眼看秋社至り」・「見る間に秋祭りの時節になり」。0100 和答詩十首 并序 【感想】通釈第2段9行「格段に成長し」→「随分と異なっ」。0101 和答詩十首 其一 和思歸樂詩 余説18行「歳」→「歳」。0102 和答詩十首 其二 和陽城驛詩 余説72行「らず」→「らざる」。0105 和答詩十首 其五 答四皓詩 解題1行「角」→「角」。余説2行「堯」→「堯」。※→0085。7行「り」→「たり」。33行「其れ」→「其の」。0106 和答詩十首 其六 和雉媒詩 【感想】解題3行「に敷衍し」→「の問題へと移し替え」。通釈3行「でもある」→「な」。余説3行「種の」→「種」。※ここの「一種」は『漢語大詞典』第1巻p.97のこの語の釈義③「一样；同样」が当てはまり、「同じように」という意味で使われていると見られる。9行「(と)び」→「(かへ)つて」。17行「胃挂(けんくわい)」→「胃掛けて」。19行「恨みて～触れたり」→「恨む 触れたるを」。0107 和答詩十首 其七 和松樹詩 【感想】通釈5行「気候の変動」→「寒暖の変化」。※「気候」は「長い年月を通じてみた、温度・湿度・気圧・雨量などの天気の状態」（『福武国語辞典』）。余説2行「たうたう」→「しようしよう」（慣用音なら「どうどう」）。6行正文→「何不<sub>レ</sub>種<sub>二</sub>松樹<sub>一</sub> 使<sub>雨</sub>之<sub>レ</sub>搖<sub>レ</sub>清風<sub>甲</sub>」。書下→「何ぞ松樹を種<sub>レ</sub>ゑ 之をして清風に揺れしめざる」。10行「為り」→「為るも」。0110 和答詩十首 其十 和分水嶺詩 【感想】余説17行「なる」→「まれる」。【感想】18行「くら」→「か」。※「らむ」はいわゆる現在推量の助動詞。推量の助動

詞「む」の方が適切では？0111 有木詩八首 并序 序 書下 2行「蠱」「蠱」。  
 【感想】7行「しめ」→「し」。其一第16句「栽之徒爾為」書下・通釈→「栽  
 うるも徒爾なるかな」・「～植えても木材としては全く役に立たないのだよ」。  
 ※この「為」は『漢語大詞典』第6巻1107頁のこの字の積義<sup>㊤</sup>助詞の条の8  
 行目に言及されている「表感叹」の用法が当てはまると思われる。0118 有木  
 詩八首 其八 余説8行「而」→「而も」。0120 歎魯詩二首 其二 【感想】第  
 8句書下「るや」→「るを」。0121 反飽明遠白頭吟 余説29行「何をか錢刀  
 を用（もつ）て為さん」→「何ぞ錢刀を用ゐんや」。※原文末尾の「為」は、  
 『漢語大詞典』第6巻p.1107のこの字の条の<sup>㊤</sup>「助詞。(1)用在句末，常与  
 “何”、“奚”等相配合，表疑問或反詰」の用法。0124 新樂府序 【感想】通  
 釈第1段23行「に苦しむ様子を詠った」→「を憎む」。【感想】第2段3行  
 「道理にしたがったもの」→「やり方」。0125 七德舞 【感想】第2句書下  
 「傳へて武徳より」→「武徳より傳へて」。0128 海慢慢 【感想】余説3行  
 「しや」→「しか」or「きや」。0129 立部伎 【感想】小序原注書下2行「め  
 ば」→「むれば」。0131 上陽白髮人 解題1行・2行「髮」→「髮」。通釈第  
 4段4行「させら」→「さ」。0133 新豊折臂翁 【感想】第11段書下2行  
 「を」→「こと」。0134 大行路 【感想】第5段書下1行「ずれば」・第6段  
 書下1行「せば」→「ぜば」・「せば」or「ずれば」・「すれば」。※未然形+「ば」、  
 已然形+「ば」のいずれかに統一したほうがいいのでは？ 【感想】通釈第3  
 段「もう牽牛星」→「牽牛星」。0135 司天臺 第6段第5句「安用司天臺高  
 百尺為」書下→「安くんぞ司天の臺の高さ百尺なるを用ひ（ゐ）んや」。※→  
 0121。通釈第1段2行「堯」→「堯」。※「堯」は俗字。0136 捕蝗 【感想】  
 第3段書下1行「始めは兩河よりし」→「兩河より始まり」。0137 昆明春水  
 滿 第3段2行正文・書下「蓮」→「蓮」。【感想】通釈第7段「はずの」→  
 「ことになる」。0141 五絃彈 第11段書下「越」→「越」。【感想】通釈第5  
 段「圧」→「制」。語釈15行「かつ」→「えつ」。0142 蠻子朝 語釈第9段  
 6・7行「江」→「紅」。0143 驃國樂 【感想】第12段2行「芻蕘」→「芻  
 蕘」。※「芻」の「す」は慣用音だが、この熟語の場合、「すうぜう」と読むの  
 が一般的ではないか。通釈第2段「まし」→「ましになり」。0144 傳戎人 第  
 8段「遣着皮裘繫毛帶」書下→「皮裘を着 毛帶を～」。第15段2行書下「さん  
 さん」→「らん」。第17段4行書下「たる」→「たり」or「たらん」。【感想】  
 通釈第5段2行「ひどい」→「深刻な」。通釈第6段「まで憤りでブンブンさ  
 せている」→「から憤怒が噴き出さんばかりだ」。0145 驪宮高 通釈第6段1  
 行「慈愛されてい」→「慈しんでおられ」。0146 百練鏡 解題2行「皇鑿を  
 辨ずるなり」→「辨皇鑿也」。3行「皇王の鑿を美（よみ）するなり」→「美皇  
 王鑿也」。0147 青石 第1段第3句書下「欲す」→「欲する」。0149 西涼伎

第7段2行書下「憂ふ」→「憂ふる」。第4段「迴頭向西望」通釈→「西の方を眺め」。第12段「奈何仍看西涼伎」書下・通釈→「奈何ぞ仍ほ〜」・「ここにいる将軍や兵士がそれでもなお西涼から〜」。※ここの「仍」は現代語の「还」と同様の意味と思われる。霍松林前掲書 p.182 では、この句は「为什么还看西涼的杂技」と訳されている。通釈第1段2行「深い衣裳を奮い立たせ」→「皮の服をぶるぶる揺らし」。第2段2行「陥落しなかった時分」→「攻め落とされていなかったころ」。第5段1行「観て見飽きることがない」→「観て観飽きることがなかった」or「見て見飽きることがなかった」。※「観」か「見」、どちらかに統一すべし。【感想】第8段「の西方僅か一五〇キロメートル」→「から目と鼻の先」。※「僅か一五〇キロメートル」は原文にない。都から近いことを読者に分かってもらうために言葉を補って訳すにしても、前の行に「里」とあるのに、この行で「メートル」を使うのは、あまりにもなりふり構わない感じがする。0154 杜陵叟 【感想】 解題3行「隣」→「鄰」。第8段「昨日里胥方到門」通釈「村の」→「ようやく村の」。※「方」の訳語を追加した。0158 陰山道 第4段2行書下「疋」→「疋」。0159 時勢粧 第1段2行書下「傳ふ」→「傳はる」。※「伝わってゆく」と訳す(通釈)のなら、訓読は「傳はる」。0165 官牛 第2段2行書下「ぞ」→「か」。0167 隋堤柳 第7段7行書下「らる」→「らるる」。0168 草茫茫 【感想】 第2段3行書下「重」→「重」。0175 常樂里〜 第1段第5句「工拙性不同」通釈→「〜生まれつき人ごとに違っており」。0176 答元八宗簡〜 題書下「贈らるる」→「見贈る」。※→拙稿 1-1。0177 感時 第9句「人生詎幾何」書下・通釈→「人生幾何も詎し」・「人生はいかほどもなく」。※ここの「詎」の意味は『漢語大詞典』第11巻 p.65 のこの字の条の「①副詞(2) 表示否定。相当于“無”；“非”；“不。”」が当てはまると思う。0181 招王質夫 第5句「忽因乘逸興」書下・通釈→「〜乗ずるに因らば」・「でも、気が向いたら」。※静永健《王質夫と白楽天—白居易の整屋県尉時代—》(『文学研究』93、1996年) p.57 による。0183 見蕭侍御憶舊山草堂詩、因以繼和 第2段第12句書下「抱」→「抱」。0189 聽彈古渚水 【感想】 解題4行「収む」→「収める」。0192 和錢員外禁中夙興見示 題書下「示さるる」→「見示す」。※→拙稿 1-1。解題「丁寧な受身の助動詞」→「他人の行為が己に及ぼされることを表す助字」。※→同上。第2〜5句「坐卷朱裏幕、看封紫泥書。窅窅鍾漏盡、瞳瞳霞景初」書下→「坐して巻く朱裏の幕、見て封ず。紫泥の書。窅窅として鍾漏盡き、瞳瞳として霞景初まる」。※丸山茂《白氏交遊録—錢徽(上)》(『研究紀要』(日本大学文理学部人文科学研究所) 58、1999年) p.33 ではこのように訓読されており、こちらの訓読のほうが適切である。0193 夏日獨直寄蕭侍御 【感想】 通釈第1段1行「冷徹な」は人間の性格・態度等について用いる語で、官庁を形容するのには



ふさわしくない。【感想】通釈第2段6行「悠然として心のままに楽しく」→「満足できる状態」で。※主語の「心情」と述語の「心」とが重複。0194 松聲 【感想】通釈7行「感じ」→「感じられ」。0196 贈吳丹 【感想】第2段第7・8句書下→「～稱ひて～隨ひて～」or「～稱つて～隨つて～」。※音便化しないもの同士、または音便化するもの同士というように統一したほうがきれい。0197 初除戸曹、喜而言志 第2段17・18句「唯有衣與食、此事粗關身」書下・通釈→「唯だ衣と食と、此の事 粗身はらに關する有るのみ」・「ただ衣と食、これらのものが生きていくうえでやや身に差し迫ってくるだけだ」。0201 寄李十一建 第3段第6句書下「抱」→「抱」。0203 醜楊九弘貞長安病中見寄題書下「寄せらる」→「見寄まにす」。※➡拙稿1-1。0210 及第後歸觀留別諸同年 第6句「送我出帝城」書下・通釈→「我を送りて帝城を出でしむ」or「私の帝城より出づるを送る」・「私が帝都を出るのを見送ってくれた」。※こう読まないと、「時輩六七人」（第5句）も作者とともに帝都を出たように受け取られてしまう。ちなみに中尾健一郎『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、2012年）p.91では、後者の読み。0211 清夜琴興 余説3行「鐘」→「鍾」。0216 倣陶潛體詩 其四 通釈7行「忘れて」→「忘れ」。0217 倣陶潛體詩 其五 第9句「便得心中適」書下・通釈→「便し心中の適を得ば」・「心の中が愉快になれば」。※ここの「適」には『漢語大詞典』第1巻1361頁のこの字の条の「⑤连词。(2)如果」が当てはまると思う。0223 倣陶潛體詩 其十一 第14句「坐看成白頭」通釈→「あつという間に白髪頭となるのだ」。※魏耕原『唐宋詩詞語考釈』（商務印書館、2006年）p.179に「坐看」を「眼看」と解し、本句を挙げて「言眼看已白头」と述べているのによる。語釈11行「そのまま～になる」→「あつというまに……になる」。0228 倣陶潛體詩 其十六 通釈2行「なわなれ」→「なわれ」。0232 隱几 第4句書下「なる」→「なるか」。第14句「吾今其庶幾」書下・通釈→「吾今其れ庶幾からん」・「私は今それに近い心境に達しているようだ」。※ここの「其」には『漢語大詞典』第2巻p.101のこの字の条の「②副词。(1)表推测、估计。大概、或许」が当てはまると思う。0238 首夏病間 第20句「何時是適時」書下→「～時は是れ適時ならん」。※吉川発輝『漢詩と俳句——芭蕉・蕪村・一茶・子規——』（興英文化社、1985年）p.34では「何時か是れ適時たらん」という読み。0239 晚春沽酒 第13・14句「盡將沽酒飲、酪酏步行歸」書下・通釈→「盡く將に酒を沽ひて飲まんとす、酪酏せば步行して歸らん」・「残らず酒を買って飲もう。酪酏したら歩いて帰ろう」。※「將」が支配するのは第13句末までと思われる。本詩は『西廂記』に引用されているが、深沢暹訳『完訳西廂記』（秋豊園、1934年）p.20はこれを「盡く將に酒を沽ひて飲まんとす、酪酏步行して歸る」と訓読している。第18句書下「なる」→「なるか」。0245 歸田 其二 【感想】第19句「更待明年後」

書下→「更に明年を待つて後」。0246 歸田 其三 第6句書下「なる」→「なり」。0247 秋遊原上 【感想】解題「上に」→「に」。通釈1行「涼」→「涼」。第14句「住來白髮生」の訳「住むようになってから白髪も生えたが」は前後とうまくつながらない。0248 九日登西原宴望 第6句書下「抱」→「抱」。第13句書下「向に」→「向を」。通釈1行「涼」→「涼」。0254 聞哭者 【感想】第3・4句「云是妻哭夫、夫年二十五」書下・通釈→「～哭す、夫は年二十五と」・「～哭しているので、夫の年とは二十五だということだった」。第7・8句「云是母哭兒、兒年十七八」書下・通釈→「～哭す、兒は年十七八と」・「～哭しているので、子の年は十七、八だということだった」。※夫、子の年齢も聞いた内容に含まれると考えるのが自然。0255 新構高亭示諸弟姪 通釈1行「台地」→「高台」（2か所）。0256 自吟拙什因有所懷 第6句「多被衆人嗤」書下→「多く衆人に～」。※「多」は普通の意味で使われていると思う。

【参考】Stephen Owen『The End of the Chinese “Middle Ages”』ESSAYS IN MID-TANG LITERARY CULTURE』（Stanford University Press, 1996年）p.22では「often much mocked by the public」と訳されている。余説3行「誰か」→「誰をか」。15行「人も」→「人」。※この部分を含む原文は「然當蘇州在時、人亦未甚愛重」。ここの「亦」は、「人も」という意味で使われているのではなく、しかしながら（「然」）そうはいつてもと譲歩する意味を表すために使われているのである。「人も」と読むと、日本語としては別の意味になってしまうので、避けたほうがいい。0258 閑居 通釈2行「何人」→「どんな人」。0259 詠懷 第11・12句「從茲知性拙、不解轉如輪」書下・通釈→「茲より知る性 拙く、轉ずること輪の如くするを解せざる（or 轉ずること輪の如くするを解はざる）を」・「そこで分かった 我が性が不器用で、車輪のようにくるくる転回するような生き方を理解できていない（or 車輪のようにくるくる転回するような生き方が自分にはできない）ことを」。第15・16「從茲知命薄、摧落不逡巡」書下・通釈→「茲より知る 命薄くして、摧落し逡巡せざるを」・「そこで分かった 我が命運が薄く、羽が折れ墜落して一時も青雲の中に滞留できないことを」。※第11句、第15句において、「知」の目的語、すなわち「知」った内容はそれぞれ第12句、第16句末までと考えられる。ここの「逡巡」の意味は『漢語大詞典』第10巻951頁の「徘徊不进；滞留」と考えられる。第27句書下「袍」→「袍」。0260 詠慵 第16句書下「比」→「比ぶ」。0264 遊悟真寺詩 第2段第21句「迴首見寺門」通釈→「振り返ると寺の山門が目に入り」。第6段第55句書下「漱」→「漱」。0265 酬張十八訪宿見贈 題書下「贈らる」→「見贈」。※→拙稿1-1。通釈8行「され」→「さり」。0267 酬吳七見寄 題書下「寄せらる」→「見寄す」。※→拙稿1-1。0274 舟行 第1句書下「帆」→「帆」。0277 題潯陽樓 通釈1行「驚異な」→「驚き怪し

む」。※「驚異だ」という形容動詞は辞書に見当たらないようだ。0279 北亭  
 【感想】第2段第2句書下「隨つて」→「隨うて」。※上句の「高うして」と  
 というウ音便に合わせたほうがキレイ。0281 答故人 第14句書下「六」→「六」。  
 ※「三たび」に合わせ、訓読みのルビにする。0282 官舎内新鑿小池 第14句  
 書下「漱」→「漱」。0286 約心 第2句書下「抱」→「抱」。0289 春寢 第  
 7句「休む」→「休むる」。0290 睡起晏坐 第6句「虚閑遺萬慮」書下・通釈  
 →「虚閑 萬慮を遺る」・「～雑念を忘れている」。※赤井益久『中唐詩壇の研  
 究』（創文社、2004年）p.204では「虚閑萬慮遺る」という読み。0299 食笋  
 第3句書下「抱」→「抱」。0301 招東鄰 第3句書下「する」→「す」or「せ  
 せん」。0303 香鑪峯下新置草堂、即事詠懷、題於石上 解題6行「生ゆ」→「生  
 ふ」。第1段第10句「惜哉多歳年」書下→「～多歳年」or「歳年多し」。※「歳  
 年」で一語。高木正一注『白居易 下』（岩波書店中国詩人選集第13巻、1958  
 年）p.63は後者の読み。0305 白雲期 第12句書下「さん」→「せん」。0307  
 答崔侍郎錢舍人書問因繼以詩 解題3行「舍」→「舍」。第2段「應為平生心、  
 與我同一源」書下・通釈→「應に平生の心、我と同一の源なるが為なるべし」・  
 「きつと平生の心が私と～」。0314 望江樓上作 第4句書下「抱」→「抱」。  
 0315 題座隅 第4句「曾不敵一夫」通釈→「一人前の男とは言えない」。0319  
 贖雞 第1段第16句書下「欲する」→「欲す」。余説5行「られ」→「らる」。  
 0325 題舊寫真圖 第6句書下「并せり」→「并せたり」。0335 長慶二年七  
 月自中書舍人出守杭州路次藍溪作 解題1行・通釈第1段4行「舍」→「舍」。  
 通釈第2段3行「こと」→「ことを」。8行「溪」→「溪」。0336 初出城留別  
 第6句書下「親故を」→「親故に」。0347 馬上作 【感想】第2段第15・16  
 句「何言左遷去、尚獲專城居」書下・通釈→「何ぞ言らん左遷し去るも、尚ほ  
 城を専らにして居るを獲んとは」・「予想もしなかった。左遷されても、一州の  
 主としていることができようとは」。※魏耕原前掲書 p.179に「何言」を「豈  
 料、哪里知道」と解し、本句を挙げて「言哪料贬谪后、尚为地方长官」と述べ  
 ているのによる。第3段第15句「迴首語五馬」書下→「～五馬に語ぐ」。0352  
 山雉 第9句「嗟嗟籠下雞」通釈→「～籠の中の鶏や」。※王鈇がその著『古典  
 詩詞特殊句法挙隅』（新華出版社、1999年）所収の《唐詩方位詞使用情况考察》  
 （原載『呂叔湘先生九十華誕紀念文集』、商務印書館、1995年）pp.139-140で  
 「不同的方位记号在同类结构中往往可以相通而互代」と述べ、そのような例の  
 一つとして「下」は「可以通“中”」ということを挙げている。0354 自蜀江  
 次洞庭湖口、有感而作 第2段第16句書下「想ふ」→「想う」or「想ひ」。通釈  
 第2段3行「湖の広さが」→「湖は広さが」or「湖の広さは」。通釈第3段5  
 行「戸をも」→「戸」。余説4行「しむ」→「しむる」。0357 狂歌詞 第11・  
 12句「焉用黄墟下、珠衾玉匣為」書下→「～珠衾玉匣を用ひんや」。0361 郡

中即事 余説2行「足らざる」→「足らず」。0362 郡齋暇日、辱常州陳郎中使君早春曉坐水西館書事詩十六韻見寄、亦以十六韻酬之 題書下「寄せらる」→「見寄す」。※➡拙稿1-1。第1段第8句「無絃琴在左」書下・通釈→「無絃琴 左に在り」・「糸のない琴が座の〜」。※「無絃なるも琴〜」と訓読すると、「陶淵明伝」の「無絃琴」という語を踏まえていることが分かりにくくなってしまふ。第2段第24句「冥心無不可」書下・通釈→「心を冥くすれば可ならざる無し」・「俗念を捨てれば、榮であれ枯であれ、どちらでも受け入れられるようになる」。※「冥心」は『漢語大詞典』第2巻p.449に「泯滅俗念，使心境寧靜」とある。また、1421《君子不器賦》に「冥心無我、無可而無不可」（心を冥くし我無ければ、可無く而して不可無し）というよく似た表現がある。0363 官舎 第16句書下「す」→「する」。0368 嚴十八郎中在郡日、改制東南樓、因名清輝。未立標榜、徵歸郎署。予既到郡、性愛樓居、宴遊其間、頗有幽致。聊題十韻、兼戲寄嚴 第20句「靈境有所歸」通釈「地は」→「地に」。0369 南亭對酒送春 第10句「未是全老人」書下→「〜全く老いたる〜」。0371 仲夏齋戒月 第7句「初能脫病患」書下・通釈→「初めに〜」・「初めに病気を逃れられ、ずっと〜」。0372 除官未去間 解題3行「末間」→「未間」。第15・16句「在郡誠未厭、歸鄉去亦好」通釈→「杭州での日々は確かにまだ満ち足りるほどにはなっていないけれども」。※王拾遺『白居易研究』（上海文藝聯合出版社、1954年）p.41：「詩人對於杭州有些戀戀不捨；但『王命』在身，亦無可如何：『在郡誠未厭、歸鄉去亦好。』」。0373 三年為刺史 二首其一 余説4行「惠」→「恵」。5行「爲」→「為」。0378 洛下卜居 余説3行「するを曰はずして、鶴と石とに安んずるを」→「すと曰はずして、鶴と石とを安んずと」。0379 洛中始作 第22句「猶且放詩狂」書下→「猶ほ且つ」。※ここの「猶ほは『漢語大詞典』第5巻94頁のこの語の条の「仍然」だと思われる。1224 これと似た「酔後」の起句「酒後高歌且放狂」は「酒後高歌し且つ放狂し」と読まれている（第4冊p.248）。0380 贈蘇少尹 第12句書下「宿さん」→「宿せん」。通釈2行「され」→「す」。余説1行「坐せられ誅死す」→「坐して誅死せらる」。0381 移家入新宅 通釈2行「さを憂える心」→「の心」。※「〜を憂える心配」には意味の重複あり。3行「縛も」→「縛は」。0385 林下閑歩寄皇甫庶子 題書下「皇甫」→「皇甫」。0391 泛春池 第10句書下「浮かべり」→「浮かべたり」。0392 西明寺牡丹花時、憶元九 通釈2行「どうして〜たえない」→「その移ろいゆく姿を愛惜するにたえないのは花」。0394 權攝昭應早秋書事寄元拾遺兼呈李司錄 第12句書下「袍」→「袍」。余説6行「侍る」→「侍り」。余説11行「裁（わづ）かに」→「裁して」。※ここの「裁」は『漢語大詞典』第9巻62頁のこの字の条の⑮「創作；写作」の意。『萬葉集』巻第16所収の「筑前国志賀白水郎歌十首」の左註に「裁作此歌」とあり、小島憲

之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集④』（小学館 新編日本古典文学全集 9、1996年）pp.131-132では「この歌を裁作る」と読み、「この歌を詠んだ」と訳されている。0408 春暮寄元九 解題 2行・余説 1行「懐いを見（あらは）す」→「見懐ふ」。※原文は「見懐」。➡拙稿 1-1。余説 6行「づき移す」→「ごろ移る」。0411 別舎弟後月夜 第8句書下「抱」→「抱」。0413 金鑿子碎日 題書下「碎」→「碎」。第7・8句「從此累身外、徒云慰目前」書下・通釈→「此れより身外を累はさんも、徒だ云はん目前を慰むと」・「かわいさのあまり、今後身辺のことに煩わされるだろうが、目先を慰めてくれるからいいということにしよう」。※『斯文』第43号（1965年）所収の内田泉之助《白詩三篇》pp.6-7に見える解釈による。第11・12句「使我歸山計、應遲十五年」返り点・書下→「使我歸山計、應二遲十五年一」・「我が歸山の計をして、應に遅ること十五年なるべからしめん」。0414 青龍寺早夏 第7句「殘鶯意思盡」通釈→「～鶯は、風情が感じられなくなり」。※魏耕原前掲書 p.193に「意思」を「意味、意趣」と解し、本句をその用例に挙げているのによる。語釈 2行「心情。春を惜しむ心情」→「風情、趣」。0417 曲江感秋 第3句「三年感秋意」書下・通釈→「三年 秋意を感じずるは」・「三年の間、秋の気配を感じるのは」。※『日本中国学会報』第47集（1995年）所収の丸山茂《回顧録としての『白氏文集』》p.96もこの読み。第5句正文・書下「唳」→「唳」。第9句「昔人三十二」書下→「昔 人～」。※この句と対をなす第11句「今我欲四十」は「今 我～」としか読めないから。余説 8行「相将（たす）く」→「相将（ともに）す」。※『漢語大詞典』第7巻 p.1154の「相将」の条に「相偕、相共」とある。0418 酬張太祝晚秋臥病見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※➡拙稿 1-1。通釈 8行「わが」→「おのが」。0419 立秋日曲江憶元九 語釈 3行「俗語。」削除。※『大漢和辞典』第4巻 p.1199の「應」の条に「㊦まさに云云すべし。㊦推量の助辞」としての用例として「〔字彙〕応、料度之辞。〔南史、宋武帝紀〕公亦応不忘司馬之言。」等が挙げられている。このような古い来歴を持つ語を俗語と見なすのは適当でないと思われる。0420 早朝賀雪、寄陳山人 語釈 12行「俗語。」削除。※➡0419。0421 初與元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懷因此寄 第1段第8句書下「過ぐらん」→「過ぎしならん」。第2段第22句書下「深し」→「深き」。語釈 15行「俗語。」削除。※➡0419。24行「なもの」→「な」or「だ」。※『漢語大詞典』第4巻 536頁の「珍貴」の条に㊦として「珍貴」とあるのによれば、この語は形容詞。その用例として本詩の本句が挙げられている。余説 25行「が詩に酬ゆる」→「に酬ゆる詩」。0432 秋懷 第9・10句「安得長少壯、盛衰迫天時」書下・通釈→「安くんぞ少壯を長くし、盛衰 天時に迫るを得ん」・「どうして少壯の時期を長くして、盛衰の周期を天の盛衰の周期に近づけるなん

てことができようか」。0435 祇役駱口驛、喜蕭侍御書至、兼觀新詩、吟諷通宵、因寄八韻 解題7行「という人物については未詳」→「は蕭祐」。0436 酬李少府曹長官舍見贈 題書下「贈らる」→「見贈」。➡拙稿 1-1。第7句書下「袍」→「袍」。0437 留別 第11・12句「前事詎能料、後期諶難尋」通釈→「これまでのことさえどうして予測できただろうか。まして、後日の～」。0453 歎老三首 其一 第11・12句「誰會天地心、千齡與龜鶴」通釈→「～誰が鶴や亀にばかり長寿を与える天地の心を理解できるだろう」。※0393の第5・6句とほぼ同旨。0458 同友人尋潤花 通釈3行「記し」→「記憶し」。0459 登村東古塚 第4句書下「抱」→「抱」。0478 村居臥病 又一首 第12句書下「計と」→「計を」。※こうしないと通釈の「生計を」と合わない。0487 送春 第7句「但見撲水花」書下・通釈→「～水を撲つ花」・「池の水面にたたきつけられるの見えるばかりだ」。※高木正一注前掲書 p.75, 77の読みと訳による。語釈6行「○撲～を引く。」削除。※『文選』該当箇所李善注では確かに「方言曰撲盡也」となっているが、オリジナルの『方言』では「撲…、盡也」(第三)となっている。0490 初出藍田路作 通釈4行・語釈5行「蘭」→「藍」。0493 再到襄陽、訪問舊居 第5・6句「舊遊都似夢、乍到忽如歸」書下・通釈→「～夢に似たるも、乍ち到れば忽ち歸るが如し」・「～夢の中の出来事のようにぼんやりとしたものになっていたが、こちらに着いたとたん、本来の場所に帰ってきたかのような気持ちになった」。0494 寄微之 三首 余説1行「寄せられし」→「見寄する」。➡拙稿 1-1。0495 寄微之 三首 又一首 余説1行「寄せられし」→「見寄する」。➡拙稿 1-1。0496 寄微之 三首 又一首 第1・2句「去國日已遠、喜逢物似人」通釈→「都から日々遠ざかるにつれ、人間に似たものが目に入ると嬉しくなる、そんな心境だ。」※『呂氏春秋』卷13《聽言》の「夫流於海者、行之旬月、見似人者而喜矣、及其暮年也、見其所嘗見物於中國者而喜矣、夫去人滋久、而思人滋深歟」に基づいた表現。余説1行「寄せられし」→「見寄する」。➡拙稿 1-1。0508 首夏 第14句書下「抱」→「抱」。0509 孟夏思渭村舊居、寄舍弟 解題2行「(○四二三) 詩」→「(○四二三)」。0512 南湖晚秋 第8句書下「抱」→「抱」。0513 郡廳有樹、晚榮早凋。人不識名、因題其上 解題2行「の上に」→「に」。※原文「題其上」の「上」は、『漢語大詞典』第1巻 p.261「上」の⑩「用在名詞后。(1)表示在物體的表面」が当てはまる。0518 苦熱喜涼 第5・6句「歲功成者去、天數極則變」通釈→「一年の季節の移り変わり盛りを過ぎると終わりを迎え(るものであり)、天地運行の法則は極点に達すると変化していく(るものである)」。※陳貽煥主編『增訂注釈全唐詩』第3冊(文化藝術出版社、2001年) p.338に「歳功：指一年的时序。春生、夏长、秋收、冬藏」、「天数：天地运行的规律」とある。0519 早秋晚望、兼呈韋侍御 解題1行「という人物については未詳だが、」→「は韋

辞。」※陶敏編撰『全唐詩人名考証』（陝西人民出版社、1996年）の説による。詳しくは同書 p.630。第11・12句「憫黙向隅心、摧頹觸籠翅」書下・通釈→「憫黙し隅を向く心、摧頹し籠に觸るる翅」・「沈黙し部屋の片隅ばかり見つめている心、折れてしまい籠に押し込められている翼」。※「向隅」は『漢語大詞典』第3巻 p.140に「面对着屋子的一个角落。（中略）后遂以比喻孤独失意或不得机遇而失望」とある。0520 司馬宅 第5・6句「唯對大江水、秋風朝夕波」書下・通釈→「唯だ對す 大江の水の、秋風に朝夕波だつに」・「ただ秋風に大江の水が朝夕波立つのを見るのみである」。※簡野道明『白詩新釈』（明治書院、1933年）p.261の訓読と通釈による。0521 司馬廳獨宿 第4句「家僮開被襖」通釈→「～着る物や身の回り品を包んだ風呂敷を広げる。※江藍生・曹広順編『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、1997年）p.18に「被襖」を「包裹衣物行李的包袱」と解き、その用例として本句を挙げるのによる。なお、前掲『増訂注釈全唐詩』第3冊 p.338では「行李卷、被服包」と解かれている。0523 秋槿 第8句「復歎不逡巡」書下・通釈→「～逡巡ならざるを歎ず」・「また、あつというまに散ってゆくことに慨嘆する～」。※ここの「逡巡」には『漢語大詞典』第10巻 p.951のこの語の条の⑧「顷刻；极短时间」の意味が当てはまる。0524 答元郎中・楊員外喜烏見寄 題書下「寄せらるる」→「見寄する」。→拙稿 1-1。0526 過昭君村 第6句「遽選入君門」書下・通釈→「遽に選ばれて～」・「かくて選ばれて～」。※前掲『増訂注釈全唐詩』第3冊 p.339に「遽：遂，就」とあるのによる。0527 自江州至忠州 語釈 10行の後に「『呂氏春秋』卷13「聽言」の一節を踏まえる。0496を参照されたし」を追加。0528 初到忠州登東樓、寄萬州楊八使君 第23・24句「其如美人面、欲見杳無緣」書下・通釈→「美人の面の、見んと欲するも杳として縁無きを其如せん」・「美人のかんばせを拝みたいと思っても、杳として縁がない、そんな気持ちだ」。※「其如」は『漢語大詞典』第2巻 p.102に「怎奈；无奈」とある。0529 郡中 第3・4句「欲知州近遠、階前摘荔枝」【参考】『興膳教授退官記念中国文学論集』（汲古書院、2000年）所収の周雲喬《唐代における荔枝の詩について》p.371の本詩についての言及：故郷からの音信は途絶え、山にへばりつくような城郭は退屈で時間の流れも遅い。この地が長安からどのくらい遠いかと言えば、それは階前に荔枝が実を付けていることから分かる。荔枝はここがいかに僻遠の地であるかを示す指標である。0532 寄王質夫 第22句書下「託す」→「託する」。0544 花下對酒 二首 又一首 通釈 1行「頭を振り仰いで」→「振り仰いで」or「頭を振り仰むけて」。0545 不二門 第21句「坐看老病逼」通釈→「あつという間に老いと病が迫ってきた」。※→0223。0549 東坡種花 又一首 余説 17行「治むると」→「治むと」。0550 登城東古臺 第15・16句「唯 有故園念、時從東北來」書下・通釈→「唯だ故園の念ひの、時に東北より来る

有るのみ」・「ただ故郷を懐かしむ気持ちちが、おりしも東北の～」。

0551 哭諸故人、因寄元八 解題 2 行「寄せらるる」→「見寄する」。➡拙稿 1-1。

0552 郡中春讌、因贈諸客 第 18 句「蚩蚩聚州民」通釈→「生真面目に州の民は集まってきた」。第 28 句「掩口語衆賓」書下・通釈→「～衆賓に語ぐ」・「～賓客たちに告げたのである」。通釈 10 行「音を上げ」→「鳴り」。

0554 東澗種柳 解題 1 行「側に」→「側を」。通釈 7 行「頭を振り仰いで」➡0544。

0555 臥小齋【感想】第 3 句「退臥小齋中」書下→「小齋の中に退臥す」。※第 2 句と対をなしているの、読み方をそろえた。

0568 庭松 第 31 句正文「未稱」→「未レ稱」。

0570 同韓侍郎遊鄭家池、吟詩小飲 第 16 句「尚有心情在」書下→「尚ほ心情の在る有り」。

0576 衰病無趣、因吟所懷 第 6 句正文「將捨棄」→「將レ捨棄」。0581 王夫子 第 15 句「下又不至飢寒死」書下→「～飢寒して死するに～」。

0582 江南遇天寶樂叟 第 13 句書下「袍」→「袍」。

0584 醉後走筆、酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十四二先輩昆季 第 4 段第 7 句「闔闔晨開朝百辟」書下・通釈→「～百辟朝し」・「～開くと百官が集まり」。第 6 段第 6 句書下「袍」→「袍」。語釈 18 行「未詳」→「賈竦」。※陶敏編撰前掲書の説による。詳しくは同書 p.631。

0585 和錢員外、答盧員外早春獨遊曲江、見寄長句 題書下→「寄せられし」→「見寄する」。➡拙稿 1-1。

0594 畫竹歌并引 引 4 行書下「投ぜらる」→「見投ず」。➡拙稿 1-1。引語釈 3 行「套句」→「套語」。

0595 真娘墓 解題 6 行「溪」→「溪」。長恨歌傳 通釈第 3 段 5 行「彼女たちは天子に振り向く気さえも起こさせなかった」→「天子は彼女たちを振り向きもしなかった」。

0596 長恨歌 第 1 段第 29・30 句「緩歌縵舞凝絲竹、盡日君王看不足」通釈→「緩やかなテンポの歌と静かな舞踊、これに合わせる琴や笛の音が、凝結してすすり泣くよう。そのさまを、天子は一日中鑑賞して飽くことがない」。※高木正一注前掲書 p.99 の訳文による。文脈から見ると、君王が見飽きることのなかったのは、第 29 句に表現された音楽と舞踊。第 2 段第 6 句「宛轉蛾眉馬前死」書下・通釈→「宛轉して蛾眉～」・「転げまわりもがいて、美しい～」。

※魏耕原前掲書 pp.180-182 に「宛轉」を「翻滾拚扎の様子」と解し、「宛轉蛾眉」は「蛾眉宛轉」の倒置とするのによる。第 3 段第 1 句「天旋日轉迴龍馭」通釈→「やがて、天下の～」。

※「日轉」を訳した「地は移ろって」は、日本語として奇異。第 19 句「遲遲鍾漏初長夜」通釈→「～刻まず、夜が長くなりはじめ」。

※田中克己『白樂天』（集英社漢詩大系第 12 卷、1964 年）p.53 の訳文による。第 4 段第 12 句「其上綽約多仙子」通釈→「そこにはたおやかな仙女がたくさんいた」。

※王鏊前掲書前掲論文 pp.139-141 で、唐詩では「不同的方位记号在同类结构中往往可以相通而互代」とし、そのような例の一つとして「上——可与边、畔通」「中——可与“上”通」を述べているのによる。ここの「綽約」は「仙子」の定語で、王鏊前掲書 pp.14-



16 に述べられている「定語挪前」に該当すると思われる。ここの「仙子」を仙女の意と見るのは、『漢語大詞典』第1巻 p.1140 のこの語の条で、「仙女」と釈し、本句をその用例として挙げているのによる。第31句「迴頭下視人寰處」書下→「～人寰を視る處」。※ここの「處」は『漢語大詞典』第8巻 p.836 のこの字の条の③「時, 時候」の意味。第39句「臨別殷勤重寄詞」通釈→「～彼女は何度も繰り返し伝言を～」。魏耕原前掲書 p.188 に「殷勤」を「屢屢, 頻頻」と解し、本句を挙げて「言頻頻叮嚀轉告」と述べているのによる。0597 婦人苦 第5段第3～6句「應似門前柳, 逢春易發榮。風吹一枝折, 還有一枝生」書下・通釈→「應に門前の柳に似て、春に逢へば榮を發し易く、風吹きて一枝折るも、還た一枝の生ずる有るべし」・「門前の～一枝が生じるに違いないのです」。※霍松林前掲書 p.360 に「却好象門前柳樹, 到春天容易發榮; 有一枝被風吹斷, 又還有一枝新生」という現代語訳が見える。0606 醉後狂言、酬贈蕭・殷二協律 第7句書下「袍」→「袍」。0608 代書詩一百韻、寄微之 第1段第59句書下「帽」→「帽」。『感想』第5段第15・16句書下→「～依りて～傍ひて～」or「～依つて～傍つて～」。※音便化しないもの同士、または音便化するもの同士というように統一したほうがきれい。第23・24句書下→「～多うして～長うして～」or「～多くして～長くして～」。※同前。語釈9行「は伝不詳」→「については『太平広記』卷一四七に引く『伝載』に「元和十五年、辛丘度・丘紆・杜元穎同時為遺補」等とある」。※詳しくは陶敏編撰前掲書 pp.631-632。0609 和鄭元及第後、秋歸洛下閑居 同高侍郎下、隔年及第。題下注書下「同じく高侍郎の下に」→「高侍郎下を同じうし」。※東京大学東洋文化研究所編『アジアの社会と文化Ⅲ』（東京大学出版会、1982年）所収の山之内正彦《桂——唐詩におけるその〈意味〉》p.167の読みによる。第10句書下「對さ」→「對せ」。通釈1行「日を送っている毎日」→「日々を送っているの」。※「日」と「毎日」は意味の重複。0611 東都冬日、會諸同年宴鄭家林亭 第3句「桂折應同樹」書下→「桂折る 應て～」。※「應」の解釈は張相『詩詞曲語詞匯釋』（中華書局香港分局、1962年）p.356の「應, 猶曾也」との釈義による。0615 自江陵之徐州路上作、寄兄弟 『感想』通釈2行「侵」→「冒」。※「風雪を」とのコロケーションは普通「冒す」。文部省編『外国人のための漢字辞典』（大蔵省印刷局、1966年）p.653に「風雪を冒（おか）し（in the face of）て行軍（こうぐん）（march）した」とある。0616 酬哥舒大見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※➡拙稿1-1。0617 和談校書秋夜感懷、呈朝中親友 第3句書下「袍」→「袍」。0630 下邳莊南桃花 第4句「無人解惜為誰開」書下・通釈→「人の解く誰が為に開くかを惜しむ無し」・「誰のために咲いてくれたかという点を大事に思っやれる人はいない」。※➡拙稿2。語釈1行「意味未詳～近い。」→「大事に思う境地に達している。」0632

看渾家牡丹花、戲贈李二十 【感想】題書下「家」→「家」。【感想】通積2行「鑑賞」→「觀賞」。0634 自城東至、以詩代書、戲招李六拾遺・崔二十六先輩 解題2行「不詳」→「崔斯立、字は立之」。※陶敏編撰前掲書の説による。詳しくは同書 p.633。0636 縣西郊秋、寄贈馬造 余説5行「たり」→「す」。※「警動」は動詞。『漢語大詞典』第11卷 p.414のこの語の条に「惊動；震动」とある。7行「るは」→「つては」。※「如きに至るは」の原文「至如」については『漢語大詞典』第8卷 p.786に「①连词。(1)表示另提一事」とあるのが当てはまる。0637 別韋蘇州 通積1行「君」(二か所)→「あなた」。※36歳も年長の人に対して「君」は不自然。「した」→「された」。※同前。0639 酬王十八・李大見招遊山 題書下「招かれし」→「見招く」。※→拙稿1-1。0645 和王十八薔薇澗花時、有懷蕭侍御、兼見贈 題書下「贈らるる」→「見贈る」。※→拙稿1-1。解題2行「蕭侍御は」→「蕭侍御は蕭祐」。※陶敏編撰前掲書の説による。詳しくは同書 p.633。0656 亂後過流溝寺 第3・4句「唯有流溝山下寺、門前依舊白雲多」書下→「唯だ流溝山下の寺の、門前 舊に依つて白雲多き有るのみ」。0651 春送盧秀才下第遊太原謁嚴尚書 解題1行「、嚴尚書共に不詳」→「は不詳。嚴尚書は嚴綬」。※嚴尚書については陶敏編撰前掲書の説による。詳しくは同書 p.633, 524。0658 留別吳七正字 解題2行「寄せらるる」→「見寄す」。※→拙稿1-1。0665 長安閑居 第2句「意中長似在深山」書下・通積→「意中 長に深山に在るに似たり」・「心の中は常に深山にいるのと同じような感じだ」。※赤井益久前掲書 p.178等、この読み。0668 涼夜有懷 第3・4句「好是相親夜、漏遲天氣涼」書下・通積→「好に是れ相親しむ夜、～」・「親しみ合うのもってこいの夜だが、時の過ぎるのが遅く、空気もひんやりとする」。※源世昭君哲編選『白詩選』(須磨勘兵衛板、1797年)の第3句の訓点は「好シ是レ相親ム夜」となっている。「好是」については拙稿1-2。謝思煒がその著『白居易綜論』(中国社会科学出版社、1997年)下編《白居易の家世和早年生活》の《七 白居易の早年恋愛经历》の中で、顧学頤と朱金城の考証に基づき、白居易の若いころの本詩を含む8篇ほどの詩は、そのころの恋愛の経験と関係があるが、本2句を含むいくつかの詩句は「最初只是居易因故与恋人远别、两情并未阻绝」、すなわち最初居易は故あって恋人と遠く隔たった状態にあったが、二人の恋情は決して遮断されてはいなかったことが分かるものだと述べている(pp.194-195)。この謝思煒説に基づき、恋人と一時的に離れ離れになっているときに詠まれた詩句として読んでみた。0669 送武士曹歸蜀 解題1行「伝不詳」→「武譚。『全唐文』卷五百の権徳輿《武就神道碑》に「前夫人隴西李氏、生長子譚而歿。譚爲金壇令」云々とある」。※陶敏編撰前掲書の説による。詳しくは同書 634, 451頁。第3・4句「月宜秦嶺宿、春好蜀江行」書下・通積→「月は秦嶺に宿るに宜しく、春は蜀江に

行くに好し」・「月は秦嶺に宿つてめでるのがよく、春景色は蜀江へ旅して眺めるのがよい」。0671 賦得古原草、送別 第8句書下「たるに」→「として」。

0672 夜哭李夷道 【感想】通釈2行「彼の～翻っているのがただ見え」→「ただ～翻ってい」or「見れば～ただ」→「ただ彼の～翻っているのが」。語釈1行「口調を整えるだけの助字」→「また、再び、さらに等の意」。0675 旅次景空寺、宿幽上人院 解題「旅宿。景空寺、幽上人共に」→「宿泊する。景空寺は襄陽城の南十里の白馬山中にあり、晉の釈法聰の建立にかかる。初めは靈泉寺といい、後、景空寺に改まった。幽上人は」。0676 長安正月十五日 【感想】第4句書下「萬人」→「萬人」or「萬人」。0678 寒食臥病 第6句書下「柴」→「柴」。0682 寒食月夜 第4句書下同前。0684 晚秋閑居 通釈2行「攜」→「携」。0685 秋暮郊居書懷 第6句「書卷病仍看」書下・通釈→「書卷 病みて～」・「病んでも読書～」。※前掲『白詩新釈』p.91の読みによる。同書の通釈は「病中でも尚ほ書見を廢しない」。0688 題流溝寺古松 通釈2行「積もつ」→「汚れ」。0694 寄湘靈 第3句「遙知別後西樓上」通釈→「～西樓で」。※この句の意味は北京大学首都發展研究院『文苑英華——中国古代作品講読（上）』（北京大学出版社、2021年）で、「他知道我走以后你肯定也是一个人站在西樓上～」と説明されている。「上」にはいずれも『漢語大詞典』第1巻p.261のこの字の条の「⑩用在名词后。（中略）(3)表示一定的处所或范围」が当てはまる。0701 及第後憶舊山 第4句「縱有浮名不繫心」書下・通釈→「～心に繫けず」・「～としても、それに希望を託したりはしない」。※「繫心」は『漢語大詞典』第9巻p.1025に「挂心；心有所寄托」とある。

0710 同李十一醉憶元九 【感想】第3句書下「忽ち憶ふ」：二つ前の0708では「忽と憶ふ」。訳し方に差異はないから、統一すべきでは。0711 同錢員外題絕糧僧巨川 【感想】題書下「同に」：前の0710では「同じく」と読まれている。統一すべきでは。0714 禁中九日、對菊花酒、憶元九 【感想】第3句書下「思うて」「傍ひて」→「思うて」「傍うて」or「思ひて」「傍ひて」。※音便化するもの同士、または音便化しないもの同士というように統一したほうがきれい。【感想】余説4・5行書下：題下注の書下と同一にすべきでは。0716 答張籍、因以代書 第1・2句「憐君馬瘦衣裘薄、許到江東訪鄙夫」書下→「憐れむ君 馬瘦せ 衣裘薄きも、～許すを」。0717 曲江早春 第3・4句「可憐春淺遊人少、好傍池邊下馬行」書下・通釈→「～遊人少なく、池邊に傍ひ馬を下りて行くに好し」・「喜ばしいことに春まだ浅くて、遊覧客が少ないので、馬から降りて池に沿って歩いていくことができる」。※ここの「好」は『漢語大詞典』第4巻のこの字の条の「⑨可以；便于」の意。張相前掲書p.541の「可憐(-)」の条に本二句を用例として挙げ、「言可喜遊人尚少、得以傍池閑歩也」と解いているのも参考になる。➡拙稿 1-2。0719 寒食夜 【感想】寒食が加齢

の節目として意識されていたことを注記すべきでは。【参考】平岡武夫《白居易と寒食・清明》（『東方学報』第41冊、1970年）p.300に本詩を引いて、次のように述べている。「来年は四十、不惑の齡。忘れるともなく忘れていた自分の年齢を、寒食は人に思いおこさせて衝動を与える。寒食は年の節であり境であった。」0722 同錢員外禁中夜直 第1句書下「らん」→「る」。0725 寄陳式五兄 【感想】通釈「君」→「貴兄」「大兄」等。※10歳も年上なので。0727 送元八歸鳳翔 解題1行「不詳」→「元宗簡。〇一七六、〇二五七に既出」。【感想】通釈1行「侵」→「冒」。※→0615。0729 詠懷 【感想】第2句「眼看變作白頭翁」書下・通釈→「眼看變じて白頭翁と作る」・「あつという間に白髪の人に変わり果てた」。0731 酬錢員外雪中見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※→拙稿1-1。第2句書下「閉ぢ」→「閉づ」。0735 新磨鏡 【感想】通釈2行「写し」→「映し」。0736 感髮落 解題「脱毛」→「髪が抜けるの」。【感想】第3・4句「眼看應落盡、無可變成絲」書下・通釈→「眼看應に落ち盡くすべく、～」・「あつというまに全部抜け落ちてしまうに違いない。白い糸のような白髪に変わるなんてことはないだろう」。→0729。0738 酬王十八見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※→拙稿1-1。0739 立春日、酬錢員外曲江同行見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※→拙稿1-1。0741 宴周皓大夫光福宅 解題1行「は不詳」→「については『全唐文』巻469の陸生贊《奉天薦袁高等状》に「周皓曾任丹延等都訓練觀察使、『冊府元龜』巻890に「興元元年八月、以右武衛將軍周皓為太僕卿、兼御史大夫・宣慰回紇使」等とある」。※陶敏編撰前掲書p.635の説による。第4句「絲管入門聲沸天」通釈→「～音が天にとどろくほどだ」。※「沸き起こる」は下から上への動き。上にある「天」から「沸き起こる」という表現は不自然。小尾郊一『文選（文章編）二』（集英社全釈漢文大系第27巻、1974年）に見える鮑照《蕪城賦》中の「沸天」の訳語を使わせてもらった。【感想】通釈1行「天下に」→「天下で」。0745 答元奉禮同宿見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※→拙稿1-1。0746 答馬侍御見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※→拙稿1-1。第2句「煩君問我意何如」書下→「君を煩はして我に問はしむ～」。0749 和錢員外早冬翫禁中新菊 第14句「吟翫煙景夕」通釈→「霞たなびく～」。0750 答劉戒之早秋別墅見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※→拙稿1-1。0751 涼夜有懷 【感想】第7句「闇凝無限思」は仏教の無明長夜の觀念かのに触発を言うものではないか。0756 春夜喜雪、有懷王二十二 通釈3行「雲明」→「雪明」。0757 駱口驛舊題詩 第3・4句「唯有多情元侍御、繡衣不惜拂塵看」書下→「唯だ多情なる元侍御の、繡衣惜しまず塵を拂うて看る有るのみ」。0758 南秦雪 【感想】第3・4句書下→「～雪飛ぶこと多く、～春有ること少なし」。※こう読んだ方が、原文の対句表現が生かされる。

【感想】通釈3行「幸いに猿が悲しげに鳴かないのはまだしもである」は、猿の鳴き声は悲しげなものだという漢詩文の常識のない人にとっては理解に苦しむ表現。「悲しげに」を省き、語釈で相応の説明をした方がよい。0759 山枇杷花二首 其一 第3・4句「春盡憶家歸未得、低紅如解替君愁」書下・通釈→「～歸ること未だ得ず、紅を低れ解く君に替はりて愁ふるが如し」・「～できないが、この花は赤い花の咲いた枝を垂れ、君に代わって悲しみに沈んでくれているようだ」。※→前掲拙稿2。0760 山枇杷花二首 其二 第4句「推囚御史定違程」書下→「～違へしめん」。0763 江上笛 第2・3句「聲聲似憶故園春。此時聞者堪頭白」書下・通釈→「～故園の春を憶ふに似たり。～頭白きに堪へんや」・「～一つが春をしのんでいるかのように聞こえる。～髪が白くならないで済むだろうか」。※第2句は誰かが吹いている笛の音そのものに望郷の思いがこもっているとるのが自然。第3句の「堪」は『漢語大詞典』第2巻1143頁のこの字の条の⑥「“那堪”的省文。更兼、何況」が当てはまる。0766 夜深行 余説2行「(な)→「自(な)」。4行「戌」→「戌(二か所)」。5行「り」→「たり」。0767 望驛臺 解題1行「元稹の旅先にある台の名」→「楊軍『元稹集編年箋注(詩歌卷)』(三秦出版社、2002年)p.159に「疑在望喜驛左近」とする。望喜驛は李商隱の「望喜驛別嘉陵江水二絶」に詠まれており、四川省広元市の南にある」。※もとの解説はあまりにも当たり前すぎる内容なので、仮にこのように改めた。0774 蕭員外寄新蜀茶 解題「不詳」→「蕭祐」。※陶敏編撰前掲書による。詳しくは同書p.635。0775 寄上大兄 【感想】第2句書下「るも」→「すも」。第4句書下「にし」→「し」。0781 得袁相書 第3句書下「意」→「意」。0783 感化寺見元九・劉三十二題名處 解題1行「不詳」→「王維が「過感化寺曇興上人山院」詩で詠んでいる、瀟陵(前漢の文帝の陵墓で、長安の東70里にあり、藍田からは北西の方角)近辺にあった寺のことだろう。「化感寺」にも作り、『元氏長慶集』巻14所収の「山竹枝」と題する作品には「山竹枝自化感寺携来、至清源、投之輞川耳」との原注がある。なお、「山竹枝」を楊軍『元稹集 編年箋注』(三秦出版社、2002年)は元和十年の作品とする」。※小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』(岩波文庫、1972年)p.145の解説と、二宮美那子・好川聡『王維・孟浩然』(明治書院新釈漢文大系詩人編3、2020年)p.193の語注を参考にした。0784 遊悟眞寺、廻山下、別張殷衡 解題3行「不詳」→「長慶元年、涇原の田布の幕中にいたこと以外、不詳」。※陶敏編撰前掲書p.636の考証による。0785 村居、寄張殷衡 第8句「能到茅庵訪別無」書下→「～到りて訪別すや～」。「訪別」は『漢語大詞典』第11巻p.90に「造訪告别」と解かれており、動詞+目的語型の意味構造の語ではない。0786 病中、得樊大書 第3・4句「唯有東都樊著作、至今書信尚殷勤」書下→「～樊著作の、今に至るまで 書信尚ほ殷勤なる有るの

み」。0788 晝臥 第3・4句「誰知盡日臥、非病亦非眠」→「～臥せるは、病にも～眠るにも非ざるを」。0791 有感 第3・4句「唯有衷腸斷、無應續得期」→第4句は金沢文庫系のテキストにより「無應續得期」に改めて解釈しないと、意味が通じにくい。3415「柳柳枝詞 又一首（其八）」にも「彼此應無續得期」という句（第4句）がある。書下・通釈→「～衷腸の斷つは、應に續ぎ得る期無かるべき有るのみ」・「しかし悲しみのために腸が断たれた場合だけは、再びつなぎなおすチャンスは訪れないに違いない」。0794 聞蟲 第3句「猶恐愁人暫得睡」書下・通釈→「～得たるに」・「～やっと少し眠ったのに、～」。0798 還李十一馬 解題1行「て返還した」→「た」。通釈1行「してて」→「で」。0799 九日、寄行簡 通釈1行「攜」→「携」。0800 夜坐 【感想】通釈1行「私は」→「私が」or 削除。0802 早春 第1・2句「雪散因和氣、氷開得暖光」書下→「雪散ずるは和氣～、氷開くるは暖光を得ればなり」。0803 和夢遊春詩 第2段第4句正文「應無<sub>レ</sub>復」→「應無<sub>レ</sub>復」。【感想】第4段第17・18句書下→「～中たりて、～當たりて～」or「～中たつて、～當たつて～」。※音便化しないもの同士、または音便化するもの同士というように統一したほうがきれい。第6段第7・8句「須悟事皆空、無令念將屬」書下・通釈→「～悟り、念ひをして～無かるべし」・「万事はみな空であることを悟り、思念を執着させることのないようにすべきである」。第25句書下「聚」→「聚」。0805 王昭君二首 第3句書下「き」→「くし」。0806 王昭君二首 其二 第1句「漢使却廻憑寄語」書下→「漢使却廻するとき 憑みて語を寄せしむ」。余説6行「る」→「るる」。0807 渭村退居、寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩 【感想】第1段第17・18句書下→「～薙ぎて中、～開きて～」or「～薙いで、～開いて～」。※音便化しないもの同士、または音便化するもの同士というように統一したほうがきれい。【感想】第55・56句書下→「～空しうして中、～闇うして～」or「～空しくして、～闇くして～」。※同前。【感想】第87・88句書下→「～來りて、～去りて～」or「～來つて、～去つて～」。※同前。第1段通釈5行「開」→「解」。8行「扉」→「戸締まり」。11行「身をもたらせ」→「もたれ」。第2段通釈2行「自ら我」→「我」。※意味の重複。【感想】第3段5行「疲れ」→「すり減」。【感想】6行「して」→「してやって」。0808 酬盧秘書二十韻 通釈2行「きへ」→「みに」。0809 題盧秘書夏日新栽竹二十韻 第39・40句「莫同凡草木、一種夏中看」書下・通釈→「～夏中のみと見る莫かれ」・「普通の草木と同じように、夏だけが盛りだと見なしてはいけない」。※魏耕原前掲書 p.183に「一种」を「一样、同样」と解し、本句を挙げて「言不要把竹子和一般草木一样看待，只在夏天显得茂盛」と述べているのによる。通釈12行「さや」→「そよ」。0810 渭村酬李二十見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※➡拙稿 1-1。0813 遊城南、留元九・李二十晚歸

題書下「～李二十を留めて晩く歸らしむ」。0814 廣宣上人以應制詩見示。因以贈之。詔許上人居安國寺紅樓院、以詩供奉 題書下「示さる」→「見示す」。※➡拙稿 1-1。0815 重過秘書舊房、因題長句 第5句「吏人不識多新補」書下・通釈→「～識らず 新補多く」・「～見知らぬので、新入りが多いのだろうが」。0816 見元九 第2句書下「分」→「分」（二か所）。【感想】第3句「每逢陌路猶嗟歎」書下→「陌路に逢ふ毎に 猶ほ～」。0817 高相宅 【感想】通釈1・2行「高相」→「高相先生」。※師であるから、敬意をこめた言い方にしないと日本語として不自然。0818 張十八 解題2行「張籍～嘆く」→「詩人に蹇（ゆきなや）むもの多」いことを嘆き、その一人として「張籍五十、未だ一太祝を離れず」と述べる。第3・4句「獨有詠詩張太祝、十年不改舊官銜」書下→「～張太祝の、十年 舊官銜を改めざる有るのみ」。0819 劉家花 【感想】第3句書下「ましめて」→「めて」。0820 裴五 解題「不詳」→「裴垍の弟の裴墉」。※詳しくは陶敏編撰前掲書 pp.636-637。語釈「伯仲 兄弟」→「張家伯仲 朱金城氏は張徹・張復兄弟のことではないかとする（『白居易集箋校』巻十五）。張徹については〇五八四「酔後走筆、酬劉五主簿長句之贈、兼簡張大・賈二十四先輩昆季」の解題に詳しい」。0821 仇家酒 解題1行「仇は姓。不詳」→「仇家は酒家の名と見るのが一般的である」。※「仇家酒」は篠田統《中世の酒》（藪内清編『中国中世科学技術史の研究』、角川書店、1963年）では「家釀」の一つとする。朱金城も長安の仇家という酒肆のことだろうとする（『白居易集箋校』巻15）。0822 恆寂師 第4句「一時減盡定中消」書下・通釈→「一時 減盡定中に消ゆ」・「しばらくして（or 直ちに）減盡定の中で消えてゆく」。※「減盡定」は中村元『佛教語大辞典』下巻（東京書籍、1975年）p.1358に「心のはたらきがすべて尽きてしまった三昧。六識の心作用が滅びてなくなった精神統一。（下略）」とある。ケネスK.S.チェン著、福井文雅・岡本天晴編訳『佛教と中国社会』（金花舎、1981年）p.182では「精神集中〔減盡定〕を通して一切の悩みと憂いとを消散させる」と訳されている。0824 重傷小女子 【感想】第7句書下「ましめて」→「めて」。0826 題周皓大夫新亭子二十二韻 解題2行「は不詳」→「については『全唐文』巻四六九の陸生贇《奉天袁嘉高等状》に「周皓曾任丹延等都訓練觀察使」、『冊府元龜』巻八九〇に「興元元年八月、以右武衛將軍周皓為太僕卿、兼御史大夫・宣慰回紇使」等とある」。➡0741。第3句書下「む」→「むる」。0828 見楊弘貞詩賦、因題絕句以自諭 第2句書下「末年三十三即無身」通釈→「～ならないのに、死んでしまった」。※この「無身」は『漢語大詞典』第7巻 p.114のこの語の条の「②謂身死」が当てはまる。白居易には楊弘貞の夭折を悼んだ 0393《傷楊弘貞》と題する詩がある。語釈1行「自分～有らん」と→「死ぬの意」。0829 病中早春 第7・8句「唯有愁人鬢間雪、不隨春盡逐春生」書下→「唯だ愁人の

鬢間の雪の、春に随ひて盡きず 春を逐ひて生ずる有るのみ)。0830 送人貶信州判官 第7・8句「若於此郡為卑吏、刺史廳前又折腰」書下・通釈→「若ぞ～」・「どうしてこんな～ならないなどということになったのだろう」。※この「若」については于長虹・韓闕林『常用文言虚詞手冊』（河北人民出版社、1983年）p.312に「疑問代詞，相当于“怎么”、“为什么”」とし、本句をその用例として挙げているのによる。語釈9行「どうしようも～俗語」→「どうして。なぜ。現代語の怎么・为什么に相当する。※怎的・怎得は、現代語と言うにはちょっと古い。0831 曲江醉後、贈親故 第5句「中天或有長生藥」書下・通釈→「中天に或し長生の藥有らば」・「天上にもし不老不死の藥があったら」。ここの「或」には『漢語大詞典』第5巻p.213のこの字の条の「④连词」の「(2)表示假设。犹倘若，假使」が当てはまる。0833 累土山 第3・4句「玉峯藍水應惆悵、恐見新山忘舊山」書下・通釈→「～惆悵し、新山を見て 舊山を忘れんことを恐るべし」・「～恨めしく思い、君がこの新山を眺めているうちにもとの終南山を忘れてしまうのではないかと心配するに違いない」。※助動詞「應」は第4句末までを支配している。本2句は Xiaoshan Yang 著『Metamorphosis of the Private Sphere—Gardens and Objects in Tang-Song Poetry』（the President and Fellows of Harvard College, 2003年）p.73で「Jade Peak and Lan creek should feel melancholy, Fearing you would forget the old mountain at the sight of the new.」と訳されている。0838 李十一舍人松園飲小酌酒。得元八侍御詩。敍云、在臺中推院、有鞫獄之苦。即事書懷、因酬四韻【感想】第6句書下「慮」→「慮す」。※『漢語大詞典』第7巻p.692「慮囚」に「訊察记录囚犯的罪状。慮，通“録”」とある。第8句「新草亭中好一期」書下→「新草亭中 一たび期するに好し」。※➡拙稿1-2。0841 題王侍御池亭亭解題「不詳」→「王起」。※詳しくは陶敏編撰前掲書700頁。0842 聽水部吳員外新詩、因贈絕句 解題「不詳」→「吳丹。詳しくは〇一九六「贈吳丹」の解題」。※陶敏編撰前掲書p.700に見える説による。0844 雨中、攜元九詩、訪元八侍御 第1句「微之詩卷憶同開」書下・通釈→「～同に開きしことを～」・「～一緒に開けたことがあったのを覚えている」。※「憶」が「～しようと思う」の意味で使われることはあまりないと思う。『漢語大詞典』における「憶」の積義（第7巻p.692）は「①思念；想念。②记住；不忘。③回忆。④臆度」、その他となっている。0845 贈楊秘書巨源 第4句書下「る」→「す」。0847 寄生衣與微之、因題封上 通釈2行「どしどしこの夏衣を身に着け」→「せいぜい着用するよう心掛け」。※「どしどし」を「身に着ける」の修飾語とするのには違和感を覚える。0850 戲題盧秘書新移薔薇 第3句書下「りて」→「さば」。0851 曲江夜歸、聞元八見訪 題書下「訪はれ」→「見訪ひ」。※➡拙稿1-1。第3・4句「早知相憶來相訪、悔待江頭明月歸」書下・通釈→「早に



相憶ひて来りて相訪ふを知(蓮ぼ、～)・「君が私を思い訪問してくれると分かっていたら、曲江に月の出を待って遅く帰ったりするのじゃなかったと悔まれる」。※0144「傳戎人」の「早知如此悔歸來」と同様の語法。語釈1行「すでに～俗語」→「早く」。0852 苦熱、題恆寂師禪室 【感想】通釈1行「しかし、」は不要では？0853 微之到通州日、授館未安。見塵壁間、有數行字。讀之即僕舊詩。其落句云、綠水紅蓮一朵開、千花百草無顏色。然不知題者何人也。微之吟歎不足、因綴一章、兼錄僕詩本同寄。省其詩、乃是十五年前、初及第時、贈長安妓人阿軟絕句。緬思往事、杳若夢中。懷舊感今、因酬長句 題3行書下「紅」→「紅」。0854 得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感。因成四章 第7句書下「しむ」→「しむる」。0857 得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感。因成四章 其四 第6句「松偃霜中盡冷看」書下・通釈→「～偃するも 冷やかに見るに盡す」・「松は霜～それを冷やかに見るのに任すしかない」。※徐仁甫編著、冉友僑校訂『広釈詞』（四川人民出版社、1981年）pp.424-423「尽——任」の条で「尽亦作偃、任也。助动词。训见《助词辨略》」として本句をその用例に挙げ、「谓任冷看也」と述べているのによる。0858 病中答招飲者 第2句「儘君花下醉青春」書下・通釈→「～花下 醉へ」or「君が花下に青春に酔ふに儘す」・「君は花の下で～満喫したらいい」。※小川環樹『唐詩概説』（岩波書店中国詩人選集別巻、1958年）p.209は後者の読み。※徐仁甫編著、冉友僑校訂前掲書同頁同条で本句をその用例に挙げ、「谓任花下醉青春」と述べている。語釈「どれほど……しようとも」→「…するに任す」。0859 鶯子樓三首并序 序正文6行「嫋」と書下4行「溺」不一致。【感想】通釈5行「この」→「その」。0864 藍橋驛、見元九詩 解題2行の「(」が閉じられていないため、意味不明。0865 韓公堆、寄元九 解題「前後～にある」→「藍田県の北西に位置する坂。○四九〇「初出藍田路作」の語釈を参照されたい」。0867 武關南、見元九題山石榴花見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※→拙稿1-1。解題4行「尊敬の助動詞」→「後接する動詞の表す行為・感情等が書き手・話し手に向けてのものであることを表す」。0868 紅鸚鵡 通釈「声は人語」→「発する言葉は人間」。0869 題四皓廟 【感想】通釈3行「すらなく」→「なく」。※強調のための語が「をも」の「も」、「すら」の二つあり、逆にぎくしゃくした感じがする。0873 江夜舟行 第7・8句「只應催北客、早作白鬚翁」書下→「北客を催し、～翁と作らしむべし」。0874 紅藤杖 第3・4句「唯有紅藤杖、相隨萬里來」書下→「～杖の、相隨ひて萬里來る有るのみ」。0880 白口、阻風十日 通釈3行「腐臭」→「生臭さ」。0882 盧侍御與崔評事、為予於黃鶴樓致宴。宴罷同望 第8句書下「ふ」→「ふる」。0883 舟中、讀元九詩 通釈2行「しかしかする」→「痛む」。※「しかしかする」は方言。0888 晏坐間吟 【感想】第1句書下「洛に」→「洛の」。【感想】第

2句書下「湖に」→「湖の」。第3・4句「意氣銷羣動裏、形骸變化百年中」通積→「様々な活動をするにつれて気力をすり減らし、一生のプロセスの中で形骸も変化してきた」。※「羣動」は『白氏文集』中に6例見えるが、いずれも人間の日常の諸種の活動・営為の意味で使われている。第5句「霜侵殘鬢無多黒」書下→「～侵して 多くは黒からず」。※『漢語大詞典』第7巻p.97「無」の⑦に「副詞。(1)表示否定，相當于“不”」とある。ここは平仄の関係で「無」を使ったと思われる。0889 題李山人 【感想】通積1行「にも」→「には」。0892 放言五首 并序 【感想】序書下2行「毎に之を詠じ」→「之を詠ずる毎に」。【感想】4行「河」→「河」。※黄河を意味する場合、「河」は音読みするのが一般的。例えば『論語』子罕篇の「河不出閼」は一般に「か とをいださず」と読まれている。0899 歳暮道情 其二 第4句「合是愁時亦不愁」書下→「～亦愁へざるなるべし」。0900 讀李杜詩集、因題卷後 通積P.5「君らこそ」→「こそ」。0902 獨樹浦雨夜、寄李六郎中 解題1行「地名」→「現在の湖北省黄冈市黄梅県小池鎮で、九江市に隣接する。唐宋時代の南北交通上の重要な渡し場」。※北京大学中国伝統文化研究中心編『国学研究』第45巻(北京大学出版社、2021年)所収の呉修安《唐宋時期南北交通幹道新探——江西区域視角的考察》による。通積3行「打っ」→「指し」。【感想】通積4行「今私が」→「今」。※下の「私」と重複。0903 聽崔七妓人箏 第3句「憑君向道休彈去」書下・通積→「君に憑みて向に道はん 弾き去るを休めよ」・「君にお頼みするが弾くのを続けるのをやめてくれないか」。※太田辰夫『中国語歴史文法』(朋友書店、2013年)p.222に「《去》はまた動作の継続をあらわすことがある。この用法はのち《下去》となったものであるが、わりに古く、宋代からある。またきわめて稀には唐代にもみえる」として本句を用例に挙げ、訳も付しているのによる。なお、「向道」については魏耕原前掲書p.187に「向道：即道，就說」と説いているのによったが、自信がない。0905 初到江州 解題「初めて江州に到着して」→「江州到着後まもなく」。0907 盧侍御小妓乞詩。座上留贈 第3句「好似文君還對酒」書下→「～よりも好く～」。※『漢語大詞典』第4巻p.284の「好似」の条に「胜过」と積し、本句をその用例に挙げている。顔の良さだけに限定されないと思う。0908 東南行一百韻。寄通州元八侍御・澧州李十一舍人・果州崔二十二使君・開州韋大員外・庾三十二補闕・杜十四拾遺・李二十助教員外・竇七校書 第3段第71句書下「聚」→「聚」。第75句書下「する」→「す」。通積第3段21行「飢餓と」→「と飢餓」。0910 初到江州、寄翰林張・李・杜三學士 解題「初めて江州に到着し」→「江州到着後まもなく」。第8句書下「する」→「す」。0911 庾樓曉望 解題3行「収める王貞白の「庾樓曉望」詩に」→「王貞白の「庾樓曉望」詩として」。第1句「獨憑朱檻立凌晨」書下・通積→「～憑り 立ちて晨を凌ふれば」・「～欄干にもた

れ、夜明けを迎えようと立っていると」。第3句「竹霧曉籠銜嶺月」書下→「～嶺を銜む月」。※金子元臣・江見清風『和漢朗詠集新釈』（明治書院、1910年）は「銜嶺月」を「嶺を銜む月」と読み、語釈に「有明の月の、山に端に落ちかゝれる形の、嶺をふくむが如きをいふ」と説いている（P.191）。余説6行に追加：『源氏物語』若菜上に第五句の「猶殘雪」を引いて、「雪はところどころ残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬ程なるに、なほ残れる雪、と、忍びやかに口ずさみたまひつゝ、御かうしうちたたきたまふも、久しくかゝる事なかりつるならひに、人々もそらねをしつゝ、やゝ待たせたてまつりて、ひきあげたり」と。※玉上琢彌『源氏物語評釈』第7卷（角川書店、1966年）pp.119-120による。0913 江樓宴別 第1句書下「<sup>ほ</sup>袍」→「<sup>うなが</sup>催」。第2句書下「<sup>ほ</sup>袍」→「<sup>ほ</sup>袍」。0916 答春 第2句「從道風光似帝京」書下・通釈→「～似たりと道ふと從も」・「風景は長安と変わらないといつても」。※徐仁甫編著、冉友僑校訂前掲書 p.365「从道——纵道」の条に「从道犹“纵道”，俗言虽说，让步连词」として本詩を例に引き、「从道与其奈相纵擒」と述べているのによる。語釈1行「言うままに～俗語」→「…ではあるが。…とはいつても」。0917 櫻桃花下歎白髮 【感想】第1・2句書下→「～逐うて～隨うて～」or「～逐ひて～隨ひて～」。※音便化するもの同士、または音便化しないもの同士というようにそろえたほうがきれい。0919 移山櫻桃 【感想】第2句書下「に満ち」→「を（orに）満たし」。0922 北樓送客歸上都 第6句「殘酒重傾簇馬蹄」書下・通釈→「～馬蹄を簇む」・「馬をとどめ、あらためて残り酒をあおった」。※魏耕原前掲書 p.186に「簇」を「犹言停、驻」と解し、本句を挙げて「驻马蹄，谓停下不走」と述べているのによる。0923 北亭招客 第7句書下「する」→「す」。0924 宿西林寺、早赴東林滿上人之會。因寄崔二十二員外 通釈3行「聞いている」→「聞いた」。0925 遊寶稱寺 第1句「竹寺初晴日」通釈→「～竹林がようやくからりと晴れ」。0926 早春聞提壺鳥、因題隣家 解題1行「表」→「擬」。2行「表意は」削除。第1句書下「<sup>もよほ</sup>催」→「<sup>うなが</sup>催」。第2句書下「喜び聞く」→「聞くを喜ぶ」。※この方が第1句との対が明瞭になる。第6句書下「き」→「し」。0927 見紫薇花、憶微之 通釈1行「うす暗く」→「暗く淡い色で」。0929 湖亭望水 第5句「岸没閭閻少」通釈→「～岸边には民家も少なく」。※梁鑒江選注・潘步釗導読『白居易詩選（第二版）』（三聯書店（香港）、2021年）は「閭閻」を「民舍」と注している（p.5）。第7・8句「可憐心賞處、其奈獨遊何」通釈→「残念だ。実に楽しむべき好風景なのに、一人ぼっちの遊覧であるのが情けない」。※梁鑒江選注・潘步釗導読上掲書に次のような解釈と注釈がある。—「“可憐”二句：在心賞風景的時候，我如何對付因孤獨而引起的悲涼？這樣美好的景色也不能使我快樂，真是可惜啊！“可憐”：可惜。（中略）處：時間名詞，非指處所。相當於“在……時候”，“在……

之際”」(p.5)。0936 紅藤杖 解題2行「～み有り～来る」→「～、相隨ひて萬里来る有るのみ」。第3句書下「<sup>とど</sup>時時」→「<sup>とど</sup>時時」。0939 寄蘄州董與元九、因題六韻 解題1行「にある」→「の」。0940 秋熱 第3・4句「猶道江州最涼冷、至今九月」通釈→「～だといって、今に至るも、冬着の支度をする九月になっても夏衣を～」。※「九月」は『詩經』豳風《七月》の「九月授衣」の句を踏まえていると思われるので、その意を込めて訳してみた。0944 端居詠懷 第3・4句「斜日早知驚鵬鳥、秋風悔不憶鱸魚」書下・通釈→「斜日に早に鵬鳥に驚くを知らば、秋風に悔ゆらくは鱸魚を憶はざりしを」・「夕日を浴びつつ、屋敷に飛び込んできた鵬鳥に驚くことになると早くから分かっていたらと、秋風に吹かれて、鱸魚の膾を懐かしく思わなかったことが悔やまれる(つまり、家を離れなければならぬような不吉なことが起こると分かっていたら、それより前に故郷に帰っておけばよかったの意)」。※→0851。0945 夜宿江浦、聞元八改官、因寄此什 第1句「我汎滄浪欲二年」通釈→「～二年になろうとしている」。第7句書下「報」→「報」。0948 送客之湖南 第2句「事事堪傷北客情」書下→「事事傷ましむるに堪へたり～」。※「傷」+「北客情」は動詞+目的語の関係。0949 百花亭晚望、夜歸 第1句「百花亭上晚徘徊」通釈→「百花亭の辺りを夕暮れに～」。※ここの「上」は『漢語大詞典』第1巻 p.261 のこの字の条の「⑩用在名词后。(中略)(3)表示一定的处所或范围」が当てはまる。→0694。0954 廳前桂 第4句「山中猶校勝塵中」通釈→「～在るのよりまだましである」。※「校」は「比較」の意(『漢語大詞典』第4巻 p.999「校」の⑫)。比べているだけであり、その差は「若干」とは限らない。なお、魏耕原前掲書 pp.194-198 では、このような比較の意味で使われる白詩中の「校」を七つに分類し、その六番目として「太, 甚, 頗, 很, 程度副詞」と解し、本句を挙げて「言山中还是頗胜尘中」と述べている。0960 元和十二年淮寇未平。詔停歲仗。憤然有感、卒爾成章 解題7行「用い」→「用ゐ」。11行「羅」→「配」。0970 詠懷 第1・2句「自從委順任浮沈、漸覺年多功用深」書下・通釈→「委順して浮沈に任せてより、～」・「浮こうと沈もうと自然の成り行きに任せるようになってから、年月を重ねるとともに修養が深まってきたのを感じる」。※「委順」は確かに『莊子』知北遊の一節に発する語だが、ここでは動詞として使われていると思われる。本句におけるこの語について、王克仲『古今詞義辨析詞典』(黒龍江人民出版社、1993年) p.142では「无为而听从自然安排」と釈し、陳貽煥主編前掲書第3冊 p.411では「顺应自然」と釈している。「功用」の意味を、『漢語大詞典』第2巻 p.767のこの語の条は④「指修养, 造诣」とし、本句をその用例に挙げている。語釈1行「自然のなりゆき」→「自然の成り行きに順応する。『白氏文集』〇五六四に「委順」と題する作がある。この語の出自は」。0972 箬峴東池 解題「不詳」→「今の浙

江省長興県西北の箬峴山のふもとにあった」。※魏嵩山『中国歴史地名大辞典』（広東教育出版社、1995年）p.1224。第2句「早荷新苻綠參差」通釈→「～苻ははまだまばらである」。※北京大学中国伝統文化研究中心編『国学研究』第2巻（北京大学出版社、1994年）所収の蔣紹愚《白居易詩詞語詮釈》p.279に本句を挙げ、「應為“稀疏”之意」と述べているのによる。0974 哭従弟 第3句「一片綠衫消不得」書下・通釈→「一片の緑衫 消き得ず」・「ずっと緑衫を着たままで役目を終えた」。※ここの「消不得」については魏耕原前掲書 p.186に「言一領緑衫解除不了」とあるのによる。0984 遺愛寺 第3句書下「時時」→「時時」。0988 醉中戲贈鄭使君 第3・4句「雙娥留且住、五馬任先廻」書下・通釈→「雙娥は留めて～、五馬は先に廻るに任す」・「奇麗所は引き留めてそのまま相伴させ、太守は先にお帰りになるというからお帰りにいただいた」。※題下注に言うところに従えば、こうなる。徐有富『唐代婦女生活与詩』（中華書局、2005年）p.282にこの詩に詠まれている状況を「酒喝到一半，白居易还没有过瘾，让郑使君先回而将两名妓女留下来继续陪他喝酒」と説明している。第5句書下「催」→「催」。第8句「臨老覓重來」通釈→「～今、一時的に復活したようだ」。0990 酬元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※➡拙稿 1-1。解題 2行「名不詳」→「元宗簡」。※陶敏編撰前掲書 p.641, 437に見える説による。第5句書下「催」→「催」。0991 偶然二首 第2句「放棄合宜何惻惻」書下→「放棄せらるるは合宜にして（or なり）～」。『漢語大詞典』第3巻 p.150の「合宜」に「合适，恰当」とあり、形容詞。0992 偶然二首 其二 【感想】第7句書下「四」→「四」。0993 中秋月 第1句「萬里清光不可思」通釈→「～月光は不可思議なものだ」。※筆者には「不可思」は「不可思議」とほぼ同義のように感じられる。『漢語大詞典』第1巻 p.402の「不可思議」には「佛家語。指思维和言語所不能达到的微妙境界」とある。第3句書下「す」→「する」。第4句書下同前。第7句「照他幾許人腸斷」書下・通釈→「他の幾許の人をか照らして腸断たしめん」・「月はどれほどの人を照らして断腸の思いに沈ませるのだろうか」。0995 攜諸山客同上香爐峯、遇雨而還。沾濡狼藉、互相笑謔。題此解嘲 第1句「蕭灑登山去」通釈「登って行」→「登っ」。※「登って行った」とすると、作者が含まれていないような印象になる。0996 彭蠡湖晚歸 第5～7句「何必為遷客、無勞是病身。但來臨此望」書下・通釈→「～必ずしも遷客たらん、是れ病身なるを勞はず無し。但だ來りて此に臨まば」・「必ずしも左遷の身でなくとも、また、病身でなくとも」。※「無勞」は『漢語大詞典』第7巻 p.139に「犹无须，不須」とある。第7句を簡野道明前掲書は「但來りて此に臨まば」と読んでいる（p.97）。0997 酬贈李鍊師見招 題書下「招かれし」→「見招く」。1011 元九以綠絲布・白輕裕見寄。製成衣服、以詩報知 題書下「寄せらるる」→「見寄す」。

※➡拙稿 1-1. 1043 送友人上峽赴東川辟銘 第 11・12 句「憐君經此去、為感主人恩」書下・通釈→「～去るは、主人の～為なるを」・「君が、主君たる節度使の恩に感じて、この難所を経て蜀に赴任してゆくのを可哀想に思う」。1046 題詩屏風絶句 并序 5 行「永以為好」書下・通釈→「～好と為す」・「永く友情の印とした～」。※『詩経』《木瓜》詩の「永以為好也」の句を踏まえた表現。1050 山中、酬江州崔使君見寄 題書下 題書下「寄せら」→「見寄す」。※➡拙稿 1-1. 1055 薔薇正開、春酒初熟。因招劉十九・張大・崔二十四同飲 第 6 句「儻有風情或可來」通釈→「～解するなら来てみたら」。1061 山中、戲問韋侍御 結句「那得入山來」書下・通釈→「那得ぞ山に入り來れる」・「どうして山に入って來たのだ」。※王鏊前掲『詩詞曲語辭例釈（第二次増訂本）』p.216 で「詩詞曲中又常見“那得”一語，（中略）也每每表示“怎”、“怎么”的意思。此時“那得”已不是詞組，而應看作一個整體的詞」と述べて、本詩の転・結 2 句を引き、「意謂你志在濟世，又確有濟世之才，現怎么也入山來了」と解釈しているのによる。1063 寄微之 第 8 句書下「一分」→「一分」。1064 醉吟二首 第 1 句書下「法」→「法」。1075 送蕭鍊師步虛詞十首卷後、以二絶繼之 結句「向道江州司馬詩」書下→「向ち道へ」。※魏耕原前掲書 p.187 にこの「向道」を「即道，就說」の意と説くのにによる。1080 聞楊十二新拜省郎、遙以詩賀 通釈 4 行「償く」意味不明。1088 江西裴常侍以優禮見待、又蒙贈詩。輒敘鄙誠用伸感謝 題書下「待せられ」→「見待し」。※➡拙稿 1-1. 第 7 句書下「念はるれ」→「見念は」。※➡拙稿 1-1. 1093 初著刺史緋、答友人見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※➡拙稿 1-1. 1100 戲贈戶部李巡官 転・結句「男兒未死爭能料、莫作忠州刺史看」書下・通釈→「～未だ死せずんば（or 死せざるうちは）～、忠州刺史と作して看ること莫かれ」・「～死なないうちは、どうして將來のことを予測できよう。私を忠州刺史で終わる人間と見なさないでくれ」。※➡拙稿 1-3. 1102 重贈李大夫 第 8 句「猶作銀臺舊眼看」書下・通釈→「猶ほ銀臺と作し舊眼もて看るに」・「今もなおかつての翰林院の高官として昔と変わらぬ接し方をしてくれるとは、～」。※「銀臺」を翰林院という官庁から引申して、そこに勤務する官僚を意味する語として扱った。但しその裏付けとなる用例を見つけているわけではない。※➡拙稿 1-3. ※徐仁甫編著、冉友侨校訂前掲書 pp.391-392 に「作犹“用”，动词」との説がある。これを採用すれば、「猶ほ銀臺の舊眼をもちて看るに」と読むことができる。1104 江州赴忠州、至江陵以來、舟中示舍弟 五十韻 第 15 句書下「れに」→「れを」。1105 題岳陽樓 解題「湖を」→「湖に」。1107 十年三月三十日、別微之於澧上、十四年三月十一日夜、遇微之於峽中、停舟夷陵、三宿而別。言不盡者以詩終之。因賦七言十七韻以贈、且欲記所遇之地與相見之時、為他年會話張本也 第 33 句「未死會應相見在」書下・通釈→「～相見る（見ゆ）べし」・「～再会できる

はずだよ」。※この「在」については、張相前掲書 p.308 に「猶云會應相見啊」との釈義があり、志村良治『中国中世語法史研究』（三冬社、1984年）p.103にも「「はずみ」をあらわす言い切りの際に用いられる。文の全体に強意を添える口語の助辞で、感嘆符「！」によってあらわされるそれにあたとされる」と説明されている。その他、表現は異なるが、曹广順『近代汉语助詞』（語文出版社、1995年）p.171・黄晓雪《说句末助词“在”》（『方言』2007年第3期）p.232にも同旨の説明が見られる。なお、このような「在」の訓読には適当な日本語を思いつかないので、読みを当てなかった。1110 初到忠州、贈李六 解題1行「初めて忠州に至り」→「忠州に着いてすぐ」。1111 郡齋暇日、憶廬山草堂、兼寄二林僧社。三十韻多敘貶官以來出處之意 第59句「會應歸去在」書下→「～去るべし」。→1107。なお、この場合、強意の日本語表現で適当なものを思いつかないので、通釈はそのままにしておいた。1114 京使回、累得南省諸公書。因以長句詩、寄謝蕭五・劉二・元八・吳十一・韋大・陸郎中・崔二十二・牛二・李七・庾三十二・李六・李十・楊三・攀大・楊十二員外 解題1行「京都」→「都の長安」。※このようにでもしないと「京都」と「長安」が別の場所のように受け取られかねない。第7句「瘴鄉得老猶為幸」通釈→「～忠州で老後を送ることができるのは、～」。※忠州に着任して間もない頃の作のはず。1125 感櫻桃花、因招飲客 第3～6句「漸覺花前成老醜、何曾酒後更顛狂。誰能聞此來相勸、共泥春風醉一場」書下・通釈→「～能く此れを聞ひて～、酔ふこと一場せん」・「しだいに美しい花の前では自分の老醜が際立つなあと感じるようになったので、最近酒を飲んだ後、狂気じみた言動に及んだことは一度もない。誰か私がこのような状態になっている今のうちに、やってきて互いに一献勧め合い、春風に吹かれてうっとりしつつ、一場の酔いを共にしてくれないものか」。※第3句は、花と自らの老醜とのコントラストを感じているものと見られる。「聞」の解釈は、張相が前掲書 pp.557-558 で「聞、猶趁也；乗也」とし、その用例として本詩の第5・6句を挙げているのによる。「泥」は『漢語大詞典』第5巻 pp.1102-1103 のこの字の条の⑤「迷惑；留連」の意味が当てはまるのではないかと思われる。「一場」は『漢語大詞典』第5巻 p.80 のこの語の条に「表数量。猶一回，一番」とし、その用例として本詩の第5・6句を挙げているのによる。【参考】本詩については、全体として簡野道明前掲書の解釈が当を得て、**蓮**と思われるので、その第3～6句の訳文を掲げておこう。一次第に花に対して此身の老いて醜くなつたのを感じて悲むばかりだ、どうして昔のやうに酒に酔ひてきちがひじみたことが出来ようぞ、それを思ふと誠に心細くなる。誰か能く自分の此歎息の言葉を聞いて、来て我に酒を勧めて呉れる者は無からうか。共に春風に親んで楽しく一場の酔を同うしたいものだが。1127 畫木蓮花圖、寄元郎中 結句「丹青寫出與君看」書下・通釈→

「～君に看しめん」・「～君に見せてあげよう」。※国文学研究資料館国書データベースの天明3年刊の山本北山『作詩志彙』に本句が引かれ、その訓点に従って読むと、「君に與へて看せしむ」となり、また、同データベースの寛政10年刊の大典禪師『詩家推敲』に本句が引かれ、その訓点に従って読むと、「君が與に看しむ」となる。いずれも既成の訓読の枠組みの中で読みを模索した結果だろうが、「與君看」はほぼ現代語の「给你看」に相応する言い方のように感じられる。1132 留北客 尾聯「笙歌隨分有、莫作帝鄉看」書下・通釈→「笙歌は分に隨ひて有り、帝郷と作して看る莫かれ」・「とはいえ、笙や歌はそれなりにどこにでもあるのだ。笙や歌を都のものとしてのみ見てはいけない」。※「隨分」については何金松『虚词历时词典』（湖北人民出版社、1994年）で「随处，到处」と解し、本聯をその用例に挙げているのによる。※➡拙稿 1-3。1102で紹介した「作」を「用」とする解を適用すれば、下句は「帝郷を作みて看る莫かれ」という読みになり、「都の尺度を当てはめて見てはいけない」といった意味になる。1139 種荔枝 結句「自向庭中種荔枝」書下・通釈→「自ほ庭中～」・「それでもなお刺史は庭に荔枝を植えるのだ」。※王鏊・曹明德編『詩詞曲語辭集釈』（語文出版社、1991年）pp.506-507所収の蔣紹愚論文で「自」について「义同“犹”」とし、その用例として本句を挙げているのによる。1140 陰雨 第8句「頼此北窓琴」書下・通釈→「此の北窓の琴に頼らん」・「北の窓辺に置いたこの琴を頼りにすることにしよう」。※平野昭昭『白居易における幽独の詩情』（『大谷学報』第63巻第4号、1984年）p.7も同様の読み。1145 東樓招客夜飲 転・結句「唯有綠樽紅燭下、暫時不似在忠州」書下→「唯だ綠樽 紅燭の下、暫時 忠州に在るに似たらざる有るのみ」。※詩仏先生・五山先生全閱『放翁詩話』（玉山堂発兌、文化10年）11丁に引く本2句、及び近藤元粹評訂の螢雪軒叢書第五卷『老学庵詩話』（青木嵩山堂、1892年）12丁に引く本2句、いずれも返り点の付け方から見て、このような訓読をしているものと判断される。私はこの読みに従っていいと思う。1149 竹枝詞 四首 其二 起句「竹枝苦怨怨何人」書下→「～何人をか怨む」。1152 酬嚴中丞晚眺黔江見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※➡拙稿 1-1。1154 答楊使君登樓見憶 題書下「憶はれし」→「見憶ふ」。※解題「受身の助動詞であるが、相手に対する敬意をも含む」→「後接する動詞の表す行為・感情等が書き手・話し手に向けてのものであることを表す。ここでは、楊使君が私を懐かしく思ってくれたということを表している」。※➡拙稿 1-1。1160 題東樓前李使君所種櫻桃花 転・結句「唯留花向樓前著、故故拋愁與後人」書下・通釈→「～留め著け、故故～」・「～樓前に残し、わざと後に残る私の愁いを搔き立てるとは」。※別解「～留め著け、故故～拋たしむ」・「～樓前に残し、しょっちゅう後に残る私の愁いを搔き立てさせるとは」。徐仁甫編著、冉友侨校訂前掲書 198



頁で本2句を取り上げ「谓时时抛愁与后人」と説いているのと、何金松前掲書88頁で「故故」を「经常，常常」と解し、その用例として本2句を挙げているのによる。1161 巴水 第1句「城下巴江水」書下→「～巴江の水」。※リズム上、こうなる。尾聯「臨流搔首坐、惆悵為何人」書下・通釈→「流れに臨み首を搔きて坐し、惆悵するを何人とか為す（or 惆悵するは何人なりや）」・「～腰を下ろし、寂しさに沈んでいるのは誰なのだろう。～」。語釈4行「○為」以下削除。1164 奉酬李相公見示絶句 題書下「示されし」→「見示す」。※➡拙稿 1-1。1167 錢虢州以三堂絶句見寄。因以本韻和之 題書下「寄せらる」→「見寄す」。※➡拙稿 1-1。1171 答州民 結句「遮渠不道使君愚」書下・通釈→「～愚かなりと道はざらしむ」・「それも仕方ないかもしれないけれど、長官様は愚かだなどと言わないでくれ」。※六如慈周『葛原詩話』巻2（池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第4巻（文会堂書店、1920年）所収）の「遮渠」の条に、本詩を取り上げ、上記のように訓読したうえで、次のように述べているのによる。一按ニ遮莫、任渠、儘渠、ミナサモアラバアレト讀ム、サキヘマカスルナリ。遮渠ハ、テウドソノ反ニテ、サキヘ遮ルナリ、官職モ忘レハテ、龍昌寺ニ路ヲ開キ、巴子臺ニ柳ヲ種ヘラル、ハ、太守ナニト云フコトヤト、州民不審ガルベシ、ソレニ答テカク云ナリ、謂ク宦情モ郷恩モ、今ハ老功ユヘナクナリス、タゞ騰々閑事ヲナシテ、目前ノ慰ヲナス、州民メツタニ使君愚ナリト云ヤルナト云意ナリ。1170 代州民問 起句「龍昌寺底開山路」通釈→「～竜昌寺の前に山道を～」。※王鏊が前掲『古典诗词特殊句法举隅』所収の《唐诗方位词使用情况考察》p.142で本詩の「龍昌寺底開山路，巴子台前種柳林」2句を挙げ、「本意指寺前和台前，但如连用兩“前”字，不仅字面重复，而且在第四字位置上平仄不对立，均为律诗所忌」と説いているのによる。1178 別種東坡花樹 兩絶 其二 承句「春至但知依舊春」書下・通釈→「春至るも但知舊に依りて春なるのみ」・「春が来ても今まで通りの春なのだ（私がないからといって変化を来さず、ちゃんと花を咲かせてくれよ）。※張相の前掲書 p.561で「知，猶管也」とし、白詩のこの句を挙げて、「儘管」の意に解しているのによる。結句「不妨還是愛花人」通釈→「～愛する人かもしれないから」。※蔣紹愚が前掲《白居易诗词语诠释》で白詩に「或许」の意の「不妨」が見られるとし、その用例として本句を挙げているのによる。1180 發白狗峽、次黄牛峽、登高寺、却望忠州 第18句「軍厨酒似油」通釈→「～油のようにこまやかだ」。※蘇軾の《村醪二尊，獻張平陽》詩に「萬戸春濃酒似油」（萬戸春は蘇軾が嶺南にいる時、自家で醸造した酒の名）とあるのからして、「酒似油」という比喩はこまやかさを言うものと思われる。1181 棣華驛、見楊八題夢兄弟詩 轉句「名作棣華來早晚」通釈→「～棣華と名付けられてから若干の年月を経ている」。※張相の前掲書 p.705で「早晚，猶若干時也」とし、その用例として

本句を挙げて、「言棣華驛之定名、已經若干年歳也」と説明しているのによる。

1197 殘春曲 承句「景遲風漫暮春情」通釈→「日が長く、風も～」。※日本漢詩だが、島田忠臣の《菅家寒食第三晨宴遇雨、同賦煙字》詩の「景遲雲合暗花前」という句について、小島憲之監修『田氏家集』巻之下（和泉書院、1994年）p.288に「〔景〕は、ひかりの意。〔景遲〕は春の日影長く暮れ方の遅いこと」とし、白詩の本句も含め「六朝から唐代にかけても例が多い」と述べられているのによる。

1200 獨眠吟 二首 結句「何曾一夜不孤眠」通釈→「～一人ぼっちで寝なかったことがあったらどうか」。

1202 期不至 解題「束」→「束をする」。起句「紅燭清樽久延佇」通釈→「～ともし、酒樽を～」。

1208 後宮詞 結句「斜倚薰籠坐到明」書下→「～坐して～」。※松浦友久『中国詩歌原論 比較詩学の主題に即して』（大修館書店、1986年）p.52、洪昇著、岩城秀夫訳『長生殿 玄宗・楊貴妃の恋愛譚』（平凡社東洋文庫 731、2004年）p.157はこの読み。

1213 早朝思退居 第7句書下「隨う」→「隨ふ」（2か所）。

1218 中書連直、寒食不歸、因懷元九 題書下「懷し」→「懷かし」。※解題の「懷かし」と揃える。

1225 待漏入閣、書事奉贈元九學士閣老 第13句書下「慙」→「慙」。

1231 登龍尾道南望、憶廬山舊隱 第8句「況被年年老逼身」書下→「～老に～」。

1232 馮閣老處、見與嚴郎中酬和詩、因戲贈絕句 題書下「嚴」→「嚴」。結句「縱有舊遊君莫憶」通釈→「たとえ昔遊んだところがあつても～」。

1236 酬元郎中同制加朝散大夫、書懷見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※➡拙稿 1-1。第10句「緋袍著了好歸田」書下・通釈→「～了らば田に歸るに好し」・「～着たら、故郷に帰るがよい」。※➡拙稿 1-2。

1240 初加朝散大僧、又轉上柱國 第5句書下「慙」→「慙」。

1241 行簡初授拾遺、同早朝入閣。因示十二韻 第3・4句「聽鐘出長樂、傳鼓到新昌」書下・通釈→「鐘の長樂より出で、鼓を傳へて新昌に到るを聽く」・「～鐘が長樂宮から出、太鼓の音が私のいる新昌里まで響いてくるのに聞き入る」。

1250 錢侍郎使君以題廬山草堂詩見寄。因酬之 題書下「寄せらる」→「見寄す」。※➡拙稿 1-1。

1251 寄山僧 第1句「眼看過半白」書下・通釈→「眼看 半白を過ぎたり」・「あつというまに五十の坂を越えた」。

1252 慈恩寺有感 結句書下「來り」→「來る」or「來りぬ」or「來れり」。※「來」は通例、四段活用の「きたる」を当てて訓読されている。ここだけカ行変格活用の「く」の連用形+助動詞「たり」として読むのは変則的なことになってしまう。完了の意味を出したければ「來りぬ」や「來れり」の読みも可能だが、完了の意味を特に強調するのであれば「來る」と読むのが訓読の通例ではないか。

1253 酬嚴十八郎中見示 題書下「示さるる」→「見示す」。※➡拙稿 1-1。

1263 和韓侍郎題楊舍人林池見寄 題書下「寄せられし」→「見寄する」。※➡拙稿 1-1。語釈 2行「強い断定」→「動作の持続進行」。※『漢語大詞典』第3巻 989頁の「得 3」（4）の積義による。

1269

酬韓侍郎・張博士雨後遊曲江見寄 題書下「寄せられし」→「見寄<sup>われに</sup>する」。※→  
 拙稿 1-1。1271 代人贈王員外 第 2 句書下「するや不や」→「すや不や」or  
 「するか不か」。1272 惜小園花 起句書下「盡き」→「盡くし」。1274 草詞  
 畢、遇芍藥初開。因詠小謝紅藥當階翻詩。以為一句未盡其狀。偶成十六韻 第 19  
 句書下「彤雲、」→「彤雲」。1276 與沈・楊二舍人閣老同食勅賜櫻桃、翫物感  
 恩、因成十四韻 第 27 句書下「慙<sup>しや</sup>」→「慙<sup>さん</sup>」。1281 玉真張觀主下小女冠阿容  
 第 7 句「迴眸雖欲語」通釈→「私は彼女を見つめ、愛を〜」。※「迴眸」は瞳  
 を巡らしただけで、「振り返る」というほどの大幅な視線や首の向きの移動を  
 意味するとは限らない。「愛を語」り合いたいほどの相手のことを描写している  
 のに、ずっと相手から視線を外していたと想定するのは不自然である。「長恨  
 歌」の「迴眸一笑百媚生」の「迴眸」も、楊貴妃が上目遣いとか横目とかで相  
 手の顔に視線を投げた時のことも含めて表現したものだろうと思われる。  
 1282 龍花寺主家小尼 語釈 1 行に追加「○一食飢 仏教における戒律の一種  
 で、毎日午前中の一食のみとされた。」※蕭帆主編『中国烹飪辞典』（中国商業  
 出版社、1992 年）p.2 で「一食」について「佛教中一个派別的戒律。即毎日只  
 吃一餐，过午不食」と説明し、その用例として本詩の頷聯を挙げている。1290  
 梨園弟子 結句書下「宮門」→「宮門を」。1292 思婦眉 転・結句「唯餘思婦  
 愁眉結、無限春風吹不開」書下→「～愁眉 結び、限り～開かざるを」。1297  
 鄰女 起句書下「娉<sup>ほう</sup>」→「娉<sup>へい</sup>」。1298 閨婦 通釈 1 行「ほほ」→「ほお」。1302  
 琵琶 承句「背却殘燈就月明」書下・通釈→「殘燈を背<sup>とほご</sup>却けて月明に就く」・「～  
 燈火を遠ざけて～」。※静永健『漢籍伝来—白楽天の詩歌と日本—』（勉誠出版、  
 2010 年）p.197 の読みによる。なお、『中国文学報』第 1 冊（1954 年）所収の  
 村上哲見《燭背・燈背ということ—一読詞瑣記—》で唐・五代の詩詞における「背  
 燈」等の表現の表すものが検討され、「背」は「[ともしびが、とばり・びよう  
 ぶ又はかべの背後にある状態]、或は「それらの背後に移す動作」を示すので  
 はないか」と帰納されている（p.89）のが参考になる。1303 和殷協律琴思 転・  
 結句「煩君玉指分明語、知是琴心伴不聞」書下・通釈→「君を煩はして分明に  
 語げしめ、是れ琴心なるを知れども伴りて聞かず」・「せっかくあなた（琴を演  
 奏している彼女）にその指で琴の音に託してはっきりとその思いを伝えても  
 らい、それが琴の音に託した恋心だと分かりはしたけれども、わざと聞こえない  
 ふりをした。」。1307 不睡 起句書下「釭<sup>こう</sup>」→「釭<sup>かう</sup>」。1308 初罷中書舍人  
 第 5 句正文：一二点が付いていない。1310 商山路有感 并序 語釈「○在 強  
 い断定を表す句末助字。当時の俗語。」削除。※この「在」には「ある、存在  
 する」という実質の意味がある。1314 寓言、題僧 結句「清涼山下且安禪」書  
 下→「～安禪す」。※通釈に合わせれば、この読み方になる。【参考】1. 『説林』  
 （愛知県立大学国文学会）17（1968 年）所収の近藤春雄《唐代小説と寓言》

p.56に本詩が引かれ、「安禅す」と読まれている。2.高文・曾広開主編『禅詩鉴赏辞典』（河南人民出版社、1995年）p.652で本詩の後半2句について、次のように解説されている。—这两句写僧人虽不忍众生于水深火热中焚溺，但终因力单薄，无可奈何，只得于清凉山下，向壁自修。1318 郢州赠别王八使君 第5句書下「分」→「分」。1320 重到江州、感舊遊題郡樓 第21・22句「郡民猶認得、司馬詠詩聲」通釈→「～まだ、江州司馬時代の私の詩を詠ずる声を～」。1326 舟中晚起 第3句「泊處或依沽酒店」通釈→「船をとめる場所と言えば酒屋のそば」。※高木正一注『白居易 下』（岩波書店中国詩人選集第13巻、1958年）p.187の訳文による。実際は「酒屋に入りびた」ったかもしれないが、詩句に即する限り、この程度の訳し方に抑制したほうがいいと思う。1336 衰病 第7句「性多移不得」書下・通釈→「性は多く移し得ず」・「生まれつきの性質はなかなか変わらない」。※第8句で言うところの、政務をいい加減にだらだらやっていることを、我が生まれつきの性質と言っているのではないか。「移不得」については、『論語』陽貨の「唯上知與下愚不移」が考え合わされるべきではないか。1337 病中對病鶴 第2句「精神不損翅翎傷」通釈→「生氣は損なわれていないのに、羽が～」。※日本語で動物について「精神」の語を使うのは、違和感がある。第5～7句「但作悲吟和唳、難將俗貌對昂藏。唯應一事宜為伴」書下・通釈→「但だ悲吟を作して唳に和せん、～。唯だ應に一事もて伴と為るに宜しかるべし」・「私はひたすら悲痛な詩を作って、この鶴の鳴き声に和することにしよう。私のような俗貌では抜きんでたものに対処することは難しいのだ。私ができるべきことは、次に述べる一つの共通点においてこの鶴と仲間になることだけだ」。※「次に述べる一つの共通点」とは、第8句に述べる、私の髪と鶴の毛の白さ。1346 和薛秀才尋梅花同飲見贈 題書下「贈られし」→「見贈る」。※➡拙稿1-1。1347 與諸客空腹飲 第9～12句「醉後歌尤異、狂來舞可難。拋盃語同坐、莫作老人看」書下・通釈→「醉後 歌ふこと尤も異しく、狂來 舞ふこと可に難からんや。盃を抛ち 同坐に語ぐ、老人と作して見る莫かれ」・「酔った後は怪しげな歌を歌い、正気を失った後も舞うことぐらいなんのその。杯を投げ出して一座の客に物申す、～」。※第9句については『青木正児全集』第9巻（春秋社、1970年）所収《白楽天詩鈔》p.337に見える「酔うた後は異げな歌を唱ひ」という訳（同氏《中華飲酒詩選》の訳も同じ）に依拠した。第10句については、徐仁甫編著、冉友侨校訂の前掲書342頁で「来犹“後”，时间副词」として本4句を挙げ、「谓狂後舞何难？不难於舞，故曰莫作老人看」と説いているのが参考になる。第11句の「語」は『論語』の「吾語女」などと同じ「告げる」の意に解するのが自然である。第12句については➡拙稿1-3。なお、青木正児の《白楽天詩鈔》p.337もこの読み方。1350 題靈隱寺紅辛夷花、戲酬光上人 語釈4行「完成を示す接尾辞」

→「動詞や形容詞の後に着いて、その程度や結果を表す補語を連結する。ここでは、「惱」が動詞。「山僧悔出家」が結果引き起こされた山の上人の心情を表す補語。1355 送李校書趁寒食歸義興山居 転句「到舍將何作寒食」書下・通積→「～將てか寒食を作す」・「～帰って、どのように寒食を過ごすのか」。※王銜が《诗词曲语辞释义补》（『中国語文』1983年第2期）p.141で「作、度、过、动词」として、本詩及びその他の用例を挙げ、「均犹言过寒食」と説いているのによる。1359 戲題木蘭花 転句「怪得獨饒脂粉態」通積→「この花だけこんなに脂と粉の妖艷な姿態が満ち溢れているのも当然だ。「怪得」は『漢語大詞典』第7巻 p.486「怪得」の条に「見“怪底”」とされている「怪底」（485頁）の二番目の釈義「难怪」が当てはまると思われる。【参考】孫逸達主編『中国历代咏花诗词鉴赏辞典』（江蘇科学技術出版社、1989年）pp.427-428の本詩に対する鑑賞文の一節：“怪得”两句，用传说巾女扮男装、代父从军、叱咤疆场的巾帼英雄木兰来映衬。怪不得这花儿竟那样富有女儿气息，木兰曾经是个女郎啊！……1361 西湖晚歸、回望孤山寺贈諸客 第7句書「望まん」→「望まんことを」or「望め」。1363 贈蘇鍊師 尾聯「猶嫌莊子多詞句、只讀逍遙六七篇」通積→「『莊子』は言葉が繁多すぎるのをいやがって、～」。※蘇鍊師が嫌っているのは、単に『莊子』が大部な点だけでなく、その叙述がくどくどと繁多な点ではないかと思われる。【参考】欧純純『唐代琴詩之風貌』（文津出版社、2000年）p.20の本詩に対する論評：此詩意境極高，闡述作者心中不為外物所擾，連《莊子》一書都覺得過份辭繁，而儘選讀《逍遙遊》等內七篇。1367 東樓南望 第5句書下「帆に」→「帆を」。1368 醉中酬殷協律 語積4行「住は動作を固定する意。」削除。※「留君夜住」は『論語』微子の「止子路宿」（子路を止めて宿せしむ）と同様の、「使」「令」等の使役動詞を使わないタイプの使役句で、「住」にも実質的な意味は備わっている。なお、1371の転句「留使君飲」も同タイプ。1369 孤山寺遇雨 第4句「風荷一向翻」通積→「～受けて辺り一面なびき～」。※徐仁甫編著、冉友侨校訂の前掲書 p.82で張相の前掲書 p.374「一向（二）」の所説を承けて、「一向犹“一片”、“一派”」と説き、その用例として本句を挙げ、「謂一派翻也」と解しているのによる。1370 樟亭雙櫻樹 結句「碧葉風來別有情」通積→「～吹いてくるとまた別の風情がある」。※『漢語大詞典』第2巻 p.625に見える「別有～」タイプの語とその釈義の一部「別有天地」：另有一种境界。「別有用心」：另外使用心力。「別有肺腸」：谓另有打算或企图。「別有风味」：另有特色。「別有洞天」：谓尘世之外，另有仙境。なお、3143 楊柳枝詞八首又一首（其六）にも「楊柳風前別有情」とあり。1376 木芙蓉花下招客飲 通積1行「いてきた」→「いた」。※「招いてきた」とすると、別の意味になる。1378 江樓晚眺景物鮮奇、吟翫成篇、寄水部張員外 尾聯「好著丹青圖寫取、題詩寄與水曹郎」書下・通積→「丹青をし

て圖もて寫し取らしめ、詩を題して水曹郎に寄せ與ふるに好し・「画工に頼んで絵画に写し取らせ、詩を題して、水曹郎に送ってやるのもってこいだ」。

※このような「好」は「よし、～しよう」というような意味ではなく、「～するのによい、～しやすい」の意味だと思う。もっとも、いずれの訳し方をして、訳文から伝わってくる意味に大差があるわけではないが。「著」は『漢語大詞典』第9巻「著4」の⑨「表示使令」の用法と見た。「丹青」は『漢語大詞典』第1巻、この語の条の④「画工的代称」と見た。【参考】王曙『唐詩的故事』（长江文艺出版社、2023年）p.195の訳文：我請人畫得了這幅美麗的江景圖，題上詩句寄給您這位水部員外郎。1381 飲後夜醒 頷聯「枕上酒容和睡醒、樓前海月伴潮生」書下・通釈→「枕上 酒容～、樓前 海月～」・「枕に着くと私の酔っぱらい姿は～、楼前には海上の月が満ち潮に～」。※「枕上～」は「枕に着くと～」の意味なので、「枕上の」とは読まない方がよい。1388 與諸客攜酒、尋去年梅花有感 第3句「年年只是人空老」書下・通釈→「～人空ら老ゆ」・「～年々自然と年を取っていくが」。※王鏊の前掲『詩詞曲語辭例積（第二次増訂本）』p.180の「空〔二〕 空自」の条に本句を引き、句中の「空」字につき「此“自”字義」と述べるのによる。1390 内道場永謙上人就郡見訪、善説維摩經。臨別請詩。因以此贈 題書下「訪はれ」→「見訪ひ」。※➡拙稿1-1。1391 見李蘇州示男阿武詩、自感成詠 解題1行「李諒に、」→「李諒が」。1394 題清頭陀 結句「更無雜樹對山松」通釈→「山上の松に向かい合うほどの高い雑木は全くない」。1397 湖上醉中代諸妓寄嚴郎中 語釈3行「覽」→「覽」。1402 湖上招客、送春汎舟 第7句「漫牽好向湖心去」書下・通釈→「漫に牽けば湖心に向かひて去くに好く」・「ゆっくりと引かせれば湖の真ん中まで行くのに行きやすい」。※➡拙稿1-2。1404 紫陽花 承句「早晚移栽到梵家」書下・通釈→「早晚ぞ移し栽ゑて梵家に到れる」・「どうしてこの寺院に移植されたのだろうか」。※前掲『广釋詞』p.429で「早晚犹“那得”或“何曾”也」として、その用例に本句を挙げ、「谓那得移栽到梵家也」と解しているのによる。1405 李德裕相公貶崖州 三首 通釈3行「状」→「定」。1407 其三 第2句書下「種ゆ」→「種う」。1408 動靜交相養賦 并序 第4段第8行書下「螻の」→「螻」or「螻も」。第6段2行「聖人其難之」書下・通釈→「聖人も其れ之を難しとせしならん」・「～難しいとお思いになっただろう」。※この「其」は『漢語大詞典』第2巻のこの字の条の②「副詞。(1)表推測、估計。大概、或許」が当てはまると思う。1409 汎渭賦 并序 第5段18行書下「愧」→「愧」。「荷」→「荷」。1411 宣州試 射中正鵠賦 第2段第2行書下「俾」→「俾」。1412 窗中列遠岫詩 第11句「宣城郡齋在」書下・通釈→「宣城に郡齋在り」・「宣城には郡役所があり」。※『國學院雜誌』第97巻第1号（1996年）所収の赤井益久《白詩風景小考——「竹窓」と「小池」を中心として——》

p.7 もこの読み。1413 省試 性相近遠賦 第2段 1~5行「原夫性相近者、豈不以有教無類、其歸於一揆。習相遠者、豈不以殊途異教、乃差於千里」書下・通釈→「夫の性相近しなる者を原ぬるに、其の一揆に~習ひ相遠しなる者は、豈に~」・『論語』で孔子がおっしゃった「性は相近し」ということについて考えてみると、その理由は人間には~ではないか。また、孔子がおっしゃった「習ひは相遠し」ということについて考えてみると、その理由は、人間は~。※「原夫~」は「夫の~を原ぬ」と読むのが、原義に即する。例えば『文選』には「原夫~」が3か所見出せるが、新釈漢文大系の高橋忠彦『文選（賦篇）』下 p.264、原田種成『文選（文章篇）』上 p.383、竹田晃『文選（文章篇）』下 p.89、いずれもこの読み方をしている。ただ、本賦では、「原夫~」が「性相近者~」と「習相遠者~」の両方にかかる、換言すれば、両方を目的語としているため、訓読の限界を超えた構文となっており、「原夫~」を「性相近者~」にのみかける、便宜的な訓読をするしかないようである。9行「所以」書下・通釈→「以てする所」・「その拠り所となる事柄を」。第3段 9~10行書下「得ば」「由れば」→「得ば」「由らば」or「得れば」「由れば」。※対になっている語句だから、未然形+「ば」か、已然形+「ば」か、いずれかに統一すべし。第4段 2行「勿謂習之近」書下→「謂ふ勿かれ 習ひの近きを」。※ここの「之」は『漢語大詞典』第1巻 p.677のこの字の条の⑥「助詞。(2) 用在主語和謂語之間，取消句子的獨立性」の用法だと思う。4行「勿謂性之遠」書下→「謂ふ勿かれ 性の遠きを」。※同前。第5段 12行「吾將以為教先」書下・通釈→「吾將に以て教先と為さんとす」・「私はこの孔子の言葉を教化に取り組み際の根本としていこうと思う」。※『老子』第42章の結語「吾將以為教父」（河上公注：「父、始也」）がよく似ている。1415 求玄珠賦 解題 4行「群を」→「群で」。1416 漢高皇帝親斬白蛇賦 解題 7行「象徴」→「寓意」。※『福武国語辞典』：【象徴】抽象的なことや精神的な内容を、その感じをもつ具体的な形・色・音などで表すこと。また、その表されたもの。シンボル。「ハトは平和の一である」。8行「群を」→「群で」。通釈第1段 3行「発露され」→「発露し」。※「発露する」は自動詞。1417 大巧若拙賦 解題 2行「群を」→「群で」。1418 雞距筆賦 解題 2行「群を」→「群で」。通釈第4段 4行「変じてしまい」→「変じ」。※ここの補助動詞「しまう」には、「不本意である、困ったことになった」のニュアンスが感じられてしまう。『大辞林』の補助動詞「しまう」の条に「その動作がすっかり終わる、その状態が完成することを表す。不本意である、困ったことになった、などの気持ちを添えたりすることもある」とある。5行「化してしまう」→「化す」。※同前。第5段 1行「取り上げ」→「採ら」。第6段 2行 10番目の字→「笈」。余説 2行「其れ~似ず。」→「其の通篇 変化すること縦横たり、亦律賦の尋常の蹊徑に似ざるは、」。※こ

う読まない、「其」の字が浮いてしまう。1420 敢諫鼓賦 解題5行「群を」→「群で」。第4段6行書下「人」→「人」。第8段10行「終用捨之由人」書下→「用捨の人に由るに終はる」。通釈第1段4行「な天子に仕立てあげて」→「の境地に到達させ」。第3段6行「ジャンジャン」→「テンテンテン」。

1421 君子不器賦 解題3行「群を」→「群で」。第2段11行書下「稱さ」→「稱せら」。12行「標さ」→「標せら」。第4段1～3行「夫、根淳精於妙有、宅元和於虚受」書下・通釈→「夫の、淳精を妙有に根づけ、元和を虚受に宅するを原ぬれば」・「有と無を超越した根源的存在の中にその純粋性を根差し、自分の心を虚しくして他人を受け入れる処世態度の中にその本源的な調和性を定着させていることの拠って来るところを探てみると」。※➡1413。1422 賦賦 解題5行「群を」→「群で」。第2段5行書下「にす」→「にせしむ」。第3段1～5行「觀夫、義類錯綜、詞采舒布。文諧宮律、言中章句。華而不艷、美而有度。雅音瀏亮、必先體物以成章、逸思飄颻、不獨登高而能賦」書下・通釈→「夫の義類～布き、文は～中り、華にして～有り、雅音～のみならざるを觀れば」・「さまざまな～節度が守られており、その正しく～賦を作ることができるといっただけではないという点によく目を向けてみると」。

- i) 笹川博司『深山の思想—平安和歌論考—』（和泉書院、1998年）所収の「白詩語「深山」の由来と行方」。

（しばた・きよつぐ 本学名誉教授）